

NCC-URM共生庵／ZOOM セミナー〈報告書〉

「第 22 回NCC-URM全国協議会」

主題「食・農・命」



2021年10月25日（月）午後1時半～午後5時半
会場 ZOOM&共生庵（広島）

目次

<呼びかけ文>再録 4 頁

開会礼拝 説教 金性済（きむ そんじえ、NCC総幹事） 5

主題講演

「食：マレーシアサラワクから共生庵へー農村での学びと交流ー」

荒川純太郎（あらかわ じゅんたろう、共生庵） 9

発題①「農：キリスト教（神学）以前ー農村伝道神学校からー」

池迫直人（いけさこ なおと、生田教会牧師・農村伝道神学校兼任教師） 2 1

発題②「農：北海道での農場経営からー三愛塾・道北センターとのつながりー」

五十嵐紀子（いがらし のりこ、北海道士別市上士別町／五十嵐農園） 2 6

発題③「命：COVID-19 について現場よりの報告」

大友宣（おおとも せん、医師、JOCS 常務理事、
医療法人 財団老蘇会 静明館診療所理事） 3 6

交流のとき 4 5

閉会礼拝 原田光雄（はらだ みつお、URM委員長） 5 2

閉会の祈り 今給黎真弓 5 5

※ 開会礼拝、閉会礼拝の記録は、説教者自身が書き起こしたものです。主題講演、発題は、テープお越し原稿を、以下の担当者が、整理したものを各講演者、発題者が加筆修正をおこなったものです。安藤真一（主題講演）、今給黎真弓（発題①）、飛田雄一（発題②）、発題③（岡本拓也）。発行が遅くなりました。加筆修正をしてくださったみなさま、申し訳ありません。（飛田雄一）

「第 22 回 N C C - U R M 全国協議会」＜呼びかけ文＞（再録）

「都市」と「農村」との実態としての関係は今日に至るまで長らく、世界の各地における近代化のプロセスの中で、「中央」と「周辺」という偏見や、両者間の格差など、私たちの社会に大きな歪みを生じさせています。その歪みは、原発の立地、米軍基地の配置、そして、新型コロナワクチンの接種状況を巡る問題などにも反映しています。

今回の U R M 全国協議会では、広島県中山間地域での 20 余年に及ぶ「共生庵」の主宰、また、それぞれの地域における「農」の営みや取り組み、そして、新型コロナの大流行に対する医療活動といった現場からの声を、まず伺います。テーマは「食・農・命」です。

1967 年に「都市産業伝道(UIM)委員会」として設置された当委員会は 1979 年、都市農村宣教(URM)委員会と改称しました。そこに当委員会の視座の変革を見ることができます。当初、60 年代の高度経済成長に伴う急激な都市化・工業化、都市への人口集中を背景に生じる諸問題を、都市の抱える課題として担う姿勢が中心であったようです。しかし、これらの問題は、裏表の関係でそのまま、多くの農・林・魚村の労働人口の激減や過疎化、経済的疲弊の問題に他なりません。両面を持つ共通の問題を、都市と工業・産業(Industrial)の側の視座のみでなく、むしろ、都市との裏腹の分かれがたい関係にある農村(Rural)の側の視座にできる限り重心を置き、見つめなおそう、という変革と言えます。

「都市－農村」或いは「中央－周辺」の关系到象徴される問題は、いつの時代にも見受けられます。これは、この世界に遣わされた教会に託された福音宣教の課題に他なりません。

新型コロナ感染防止のため、昨年の開催予定が延期された今回の全国協議会は、オンライン形式で、時間も大幅に短縮されます。私たちに託された課題を担い合い、少しでも共に前に進みたいと願います。ご参加をお待ちしています。

N C C - U R M 委員会委員長 原田光雄



「主の言葉がわたしに臨んだ。

行って、エルサレムの人々に呼びかけ／耳を傾けさせよ。主はこう言われる。わたしは、あなたの若いときの真心／花嫁のときの愛／種蒔かれぬ地、荒れ野での従順を思い起こす。」

（エレミヤ書 2 章 1-2 節 <新共同訳>）

コロナ感染危機のみならず、それに先行する時期からわたしたちの世界が深刻に直面する危機とは、わたしたちキリスト教会の宣教に何を問いかけているのでしょうか。この問題を思いめぐらしながら、この時間皆さまと共に、旧約聖書のエレミヤ書 2 章に記された“荒れ野（ミッドバール）”に注目してみたいのです。

■エレミヤの「荒れ野」

新共同訳聖書の本文では、「荒れ野での従順」と訳された「従順」とは、ヘブライ語本文では、単純に「荒れ野において後からついて行ったこと（ハーラク・アハル）」と表現されています。（協会共同訳は原文通り、「あなたが私に従ってきたこと」）

エレミヤのこの 1-2 節の本文の言葉の背景には、紀元前 722 年、北イスラエル王国のサマリヤがアッシリア帝国のセンナケリブによって陥落させられたのち、紀元前 7 世紀後半、今度はアッシリアにとってかわった新バビロニア帝国の軍隊が南側のユダ王国に迫ろうとする危機的な状況がありました。その政治的危機の中で、エレミヤは人々に「荒れ野」と「花嫁」（原義は「婚約の時」<ヘブライ語>ケルーロート）の比喻を用いて信仰の問題を問いかけているのです。エレミヤが「荒れ野において後からついて行く」、つまり、主（ヤハウェ）に従って行ったことを思い起こす、告げる言葉には、二つの意味が含まれます。ひとつは、エレミヤの時代に、自分たちのこれまでの信仰の問題をこの危機の中で深く悔い改め問

い直すことよりも、とりあえず、アッシリア勢力から自分（既得権）を守るためには、この際、エジプト側に着いて、保護を求める、というエレミヤに対する批判的勢力がエルサレムにいたことが考えられます。ですから、「荒れ野での従順」と新共同訳聖書で訳された言葉には、危機のただ中で神の前にまず自分を問おうとせず、浅薄な逃げ道に人々を扇動しようとする勢力に対してエレミヤは否と退け、主なる神に正しく立ち帰る道を人々に思い起こさせようとしているのです。

今ひとつには、「荒れ野での従順」という言葉をもってエレミヤは、出エジプトの歴史における「荒れ野」伝承に信仰（神学）的に特別な光を当てて、イスラエルの民の信仰を問い直そうとしています。イスラエルの民がカナン入植後、遂にダビデの支配のもとに統一王国を成し遂げましたが、次のソロモン王の死後（紀元前 10 世紀後半）、統一イスラエルが南北に分裂してしまいます。そして、分裂王国時代のおよそ 400 年の歴史の中で南北イスラエルは大国の狭間（南西のエジプトと、東のアッシリア、バビロニア）で政治的混迷を深めていきました。他方、そのような国際情勢の中で国内的には貧富の格差を増大させながら、イスラエルの民の信仰は、カナンの土着の偶像崇拜、豊穡を神の祝福とたたえるバール信仰と混淆し変質していくようになりました。エジプトでの奴隷的抑圧からの解放と、荒れ野放浪の苦難の中で養われたはずのヤハウェ信仰の大切な部分がパレスチナでの農耕経済の中で一部の地主による大土地所有化と多くの自営農民の小作人化という貧富格差の増大の社会の構造変化と共に歪曲されてしまったのです。そして、この政治的混迷と宗教的頹廢の中でエレミヤは、現実を冷静に直視できず、また自らの精神的頹廢を顧みず、短絡的で愚かしい道に走ろうとする政治・宗教指導者たちを批判し、民を諫めようとしているのです。

「種蒔かれぬ地」としての「荒れ野」とは、人が自分の力（労働）で作物を収穫するカナンの地への入植後の生活とは対照的に、ただ上（天）から注がれたマナによって養われた荒れ野での生活を想起させるでしょう。それは天からの神の助けによって、という意味と共に、今ひとつ、荒れ野においては誰もが富を蓄積することのない貧しさの中で共に分かち合って生き、導かれて行ったことを想起させます。すなわち、エレミヤにとって立ち帰るべき、「荒れ野」においてただひたすら主なる神に従う道として信仰とは、倫理的には、この世の富と権勢に依り頼むことなく、乏しさの中にあっても共に生きる隣人と共に互いに分かち合う生き方と切り離せないことを意味しているといえます。

そのように、エレミヤは、民がもう一度立ち帰るべきところ、すなわち、いかなる富もこの世の権勢も介在することなく、主なる神の愛を信じ、愛し合うべき隣人と向き合い、貧しさの中で支え合いながら、神と民が純粹に契約に結ばれ、向き合い、従い行く道を、「花嫁のときの愛」という理想的夫婦愛の比喩的な表現をもって説き明かそうとしたのです。

「荒れ野」というモチーフに特別な神学的意味を輝かせて民に語りかけた、エレミヤに先行する預言者として、紀元前 8 世紀末のアッシリア帝国のセンナケリブの軍隊によるエルサレムの城壁包囲（紀元前 701 年）の危機を歴史舞台とするイザヤの言葉に注目することができます。（参照：イザヤ書 35 章 1－2 節）

イザヤと比較して、エレミヤの場合、エレミヤ書全体を貫く神学的テーマのひとつ、「悔い改める／立ち帰る＜ヘブライ語＞シューブ」と、この「荒れ野」とがよりはっきりと切り結ばれていることが際立った神学的特徴といえます。忘れてならないことは、イスラエルの救済史の最大の記憶としての「出エジプト」という解放と復興への希望の文脈の中にあって、約束と成就をつなぐものとして「荒れ野」伝承は位置づけられ、包括されていることです。

今ひとつ、イザヤとの比較でエレミヤの預言の中に示された展望とは、荒れ野の信仰への立ち帰りによって導かれる「平和」（シャローム）の道が、驚くべきことに、バビロニアによる第1回エルサレム攻撃（紀元前597年）ののち、バビロニアに強制連行され捕囚された人々に託された、ということです（エレミヤ書29章4-7節）。エレミヤ書の中で31回用いられるシャロームのほとんどは、「平和がないのに、『平和、平和』と言う」（エレミヤ書8章11節）に代表されるように、否定的な意味で語られます。しかしながら、バビロニアに捕囚された民に向けられた言葉の中で用いられるシャロームから、シャロームが肯定的に、つまり未来展望的に用いられるようになるのです（エレミヤ書29章4-7節＜3回＞、11節、33章6、9節）。従って、エレミヤ書29章に及んで、第2章で語られた「荒れ野」の現場とは、実はバビロニア捕囚であった、つまり、バビロニア捕囚の苦難の歴史経験においてこそ、イスラエルの民は、「花嫁の愛」のような信仰の従順に立ち帰る道を回復し、神の民として生まれ変わる新しい契約（エレミヤ書31章27-34節）へと導かれると、エレミヤ書は、神学的に構想することになります。

■今、わたしたちの立ち帰るべき「荒れ野」をもとめ

わたしたちは、日本が歩んできた近現代の歴史の中で、キリスト教会の道を振り返りながら、エレミヤ書によって示された「荒れ野」の意味をどのように受け留められるのでしょうか。

果たして、日本のキリスト教会においては、シューブ（悔い改め／立ち帰る）に深く結びついた「荒れ野」への立ち帰りという神学的取り組みが、敗戦後の廃墟の中からの復興の道において十分になされてきたのでしょうか。結局、教団議長名でしか発表できなかった『戦争責任告白』（1967年3月）も、敗戦後22年の歳月が隔てられ、たどり着きました。その意味をめぐり、未だ議論と評価が分かれる現実の中にあります。一体、1990年代半ば以降から今日までの日本政治の保守・右傾化の流れの中で、戦責告白の信仰と神学とは、東北アジアという地平での和解と平和の神学としてどれほど深められ、今日に継承されてきたのでしょうか。

しかしながら一方、エレミヤ書によって示された「荒れ野」の信仰への立ち帰りについて思いめぐらすとき、わたしたちは、戦後の廃墟の現実の中で絶望を乗り越え、主にゆるされ、教会の復興と伝道の道に、戦後生き残ったキリスト者が「残りの者」（イザヤ書10章21、22節シェアル・ヤーシューブ；イザヤ書49章6節ネツレーイ・イスラエル）として導かれたことの意味について想起していただくことを促されているように思われます。そしてそこから再出発したキリスト教会が、この日本が高度経済成長、バブル経済、そして格差資本主

義、気候変動を経ながら感染危機の中を混迷する今、わたしたちは戦後のキリスト教会の再出発点としての「荒れ野」の道について回顧しつつ未来に向けて思いめぐらしてみる必要はないでしょうか。わたしたちの教会がいつの間にか、この戦後史の中で見失ってしまった大切なものとは何でしょうか。キリストの教会は今、神の前で、この世界（オイクメネ）に自分の立ち位置をどう見定めて、遣わされるべき「地の果て」（使徒言行録章 8 節）をどこに見据えて、だれと共に生きることによって、神ご自身が導かれる宣教に従おうとしているのか……。今や潤沢な欧米教会からの援助はすでに終わり、高度経済成長時代の豊かな蓄積も心もとない現代において、乏しさの中で内向きに萎縮する教会ではなく、この現代世界の荒れ野の現実の中で、わたしたち一人ひとりが「わたしに従いなさい」（マルコ福音書 2 章 14 節）と呼びかけられ立ち上がるはずの教会の立ち帰るべき出発点、また「エマオの途上」（ルカ福音書 24 章 32 節）について熱く語り合う、荒れ野に広げられる天幕の霊的空間、また主が再びわたしたちを岩の上に立ててくださる（詩編 27 編 5 節）ために招き入れてくださる「仮庵」（詩編 27 編 4 節）とその交わりを、わたしたちの教会と宣教は思い起こす（ザーカル）ことが求められています。76 年前、廃墟の中から絶望をこえ、キリストの中に新しいのちを見出し、皆が貧しさのあふれる地域社会のただ中で互いに支え合いながら戦後の教会の宣教を担おうとしたそれぞれの教会の経験。その想起を、エレミヤ書 2 章 1－2 節の本文をかみしめながら今わたしたちは分かち合う時を迎えていないでしょうか。

76 年前とはまた異なる意味を含みもつ現代の貧しさの現実の中で、わたしたちの都市・農村宣教が聖書の「荒れ野」の意味を問い返しながらか、今どこに立ち、何を大切にし、教会とその宣教のディアコニア（奉仕）が聖霊に熱く豊かに励まされ、どこをめざそうとしているのか、この度の全国協議会の貴重な時間と場所において参加者によって互いに分かち合われることを願ってやみません。

（この説教原稿は、第 22 回 N C C－U R M 全国協議会開会礼拝説教のためのメモから、説教者自身によって若干加筆しながら原稿にしたものです。金性済）

主題講演

「食：マレーシアサラワクから共生庵へー農村での学びと交流ー」

荒川純太郎（共生庵）



鹿野(司会)：それでは主題講演に入りたいと思います。原田委員長のほうから説明がありましたけれども、私たち昨夜こちらに到着いたしました。あまりの寒さに震え上がっておりますけれども、半日ほど里山をほんの少し体験させていただきました。共生庵を始めようと思ってこちらに荒川先生が移ってこられたのは1998年。そしてこの共生庵を開かれたのが1999年ということですから、もう22年になるわけですね。そして皆さまのお手元に資料が、メールでお配りされたと思いますが、それに書かれておりますように、サラワクというマレーシアにいらしたところから考えましたら、四十数年間で、それらの蓄積のお話を、今日、荒川先生にお願いしているのはたった1時間ですね。ですから1時間の間にどれだけお話ししていただけるか分からないけれども、さっそく始めていただきたいと思います。それでは荒川純太郎先生、どうぞよろしくお願いいたします。

荒川：皆さんこんにちは。この度はNCC-URMの全国協議会をこの共生庵で開催していただき大変光栄に存じます。共生庵に訪問してほしいと思っていた人たちがこんなにたくさんやってきてくださって、とても励まされています。

ただ、与えられた主題に応じて主題講演というお話は私には荷が重いので、マレーシアのア・サラワクにおける宣教協力を原点として現在に至るまでの共生庵の道筋を語るこの中で、その内容に沿うようなことがあれば幸いと思って準備をいたしました。レジメでは自分がどんな思いで、何をしてきたのかということ、比較的細かく書いています。それらから私の活動の背景を憶測していただければ幸いです。

まず比較的よくまとまって、私の思いや共生庵のことについて分かっていただけるだろう一つの VTR を見ていただきます。

映像「十字架のない教会の牧師」

(共生庵への思い、施設の紹介、実施されている様々なプログラムの場面、苦勞話、13 分間のビデオ(広島テレビ局の放映番組))

■サラワク宣教協力から共生庵へ

まず東マレーシア・サラワク州への在外教師派遣のいきさつと背景を述べたい。

大阪市大正区重工業地域の下町での「大正区伝道所」に 8 年間関わった。1970 年以降ころに関西キリスト教都市産業問題協議会(KUIM)の活動に参加し、その事務局長の仕事を担当するようになった。そのかわりで釜ヶ崎野宿労働者支援ボランティア活動「越冬パトロール」にたずさわった。実に多彩な都市産業宣教活動に触れ貴重な体験と学びを 10 年位続けた。

そんな中で第 2 回東南アジアスタディツアー(KUIM 主宰)に参加。アジア 5 カ国訪問したが、底辺の抑圧された人たちに寄り添う牧師・キリスト者・教会に出会い学ぶ。その際東マレーシアのサラワク州にあるイバンメソジスト教会を訪問するプログラムがあった。地の果てと思われるようなジャングルの奥深い貧しいロングハウスの片隅にまで浸透している日本製品に驚いた。その後町に戻った時に、メソジスト教会プレジデントから「御覧のように日本からはとても多くの商品が生活の隅々にまで侵略してきているが、人間はおくりこまれないのか?!」と問われた。その言葉は深く私の心に響くものだった。

アメリカはもちろんのこと、すでにフィリピン・タイ・台湾・韓国・インドネシアなどから宣教師が送り込まれていた。イバン人牧師や信徒とともに彼らが各部門で協力し見事に「チームミニストリー」を展開していたのを見て深い感動をおぼえた。そして何よりも心ひそかに憧れのようなものを感じたのは、あの大自然の熱帯多雨林と川沿いにロングハウスを建てて共同生活をする先住民イバン人のライフスタイルである。プロジェクトは農業・医療・学校・青少年育成活動・婦人地位向上・識字学級・放送伝道など多岐にわたって活発に活動されていた。このチームミニストリーの一員として加わることが許されて日本人として一緒に活動できれば素晴らしいなという期待の 2 点である。

そのような淡い希望を漏らしていた私に、帰国して 2 年後に州政府の政策として白人宣教師の滞在ビザの延長が認められないという動きの中で、同じアジア人なら受け入れ可能かもしれないということから、まだあの時の意思はあるかを問われた。一人で長く悩んだあげく、連れ合いに相談すると二言目に「行きましょう」という返事が返ってきて、参加することを即決。

早速関学神学部同窓や KUIM 関係が中心になって強力な支援会発足。1978 年、教団レベルで東マレーシアサラワク州シブ市へイバンメソジスト教会宣教協力に日本キリスト教団

在外教師として家族 4 人が派遣されることになった。1982 年までの足かけ 4 年にわたる熱帯雨林での活動体験が後に共生庵開設への素地となり大きく影響することになった。

■マレーシア・サラワクで学んだこと

複合民族社会のマレーシアでは中国系が人口の約 3 分の一を占める。第 2 次大戦をめぐるマレーシアへの日本軍侵略の戦争責任・傷跡・記述が歴史教科書などに驚くほど詳細にみることができる。

- * 巣鴨の戦争記念碑に東条英機の英霊を祭るという日本のニュースが小さなローカル紙に取り上げられた報道記事に驚いた。
- * 日本侵略記録映画「ライジングサン」が一般映画館でロングランを続けた。
- * 日本大帝国の戦時中の軍票の束を持ち出されて買い取って欲しいと迫られる。
- * 日本軍が強制労働させた稲作水田の水路が、今もジブンパリットと呼ばれ利用されている。
- * 傭兵として日本軍に雇われた従軍体験談。
- * 熱帯雨林の森林破壊 南洋材の伐採。
- * 現在はパームオイルプランテーションの巨大な開発による自然破壊。
- * マレー系・インド系・中国系華僑・少数民族・欧米外国系という多民族・多文化・多言語複合社会の豊かさ。

■食と命を大切にする「ライフスタイル」

熱帯多雨林の緑がもたらす豊かさを享受する共生社会

- * 森に備わっている生活必需品（食料・薬・果物・需品・材木・鳥や獣の動物性たんぱく質・焼畑から穀類・川や海から魚貝類）ほとんどのものを得ることができる。そのような環境を彼らは「森はスーパーマーケットだ」と表現する。そして「あなた方の町にあるコンビニのようなもの。そこにある日ブルドーザーが侵入して破壊されたならどうなるか？考えてみてほしい！」と問いかけられた。
- * 「ゴトンロヨン」相互扶助制度／ジャングルの開墾・焼き畑農業・狩猟等はすべて家族だけでなくロングハウスの人々の協力を得てする。
- * 特に焼き畑農業 持続可能な移動稲づくり 毎年移動しながら、焼畑の回復を待つて戻ってくる循環型稲作。
- * ロングハウスの居住形態（大家族共同生活・相互扶助）ジャングルの河川沿いに建てられる共同作業の長屋 で 50 m～100 m の住宅は壮観なものである。大家族の生活は「食生活」は、ほとんどのものを分かち合う。
- * 電気がないと冷蔵庫はなく保存が難しいので必要なものを必要な量だけ取り余分なものは取らない。
- * 彼らの生活スタイルを見ていると、なんらかの事故等で地球の破滅的状况等に遭遇して

も彼らは先住民族生き残るだろうと考える。

■共生庵を始める動機・背景

一方で私は現代社会の病む人・苦闘する人・助けを求める人などへの対応等、都市における教会で大きな限界を感じていた。

心と体のアンバランスがもたらす歪・ひずみに自他ともに苦闘する。農的暮らしへのあこがれ、土に足をつけて生きる、安全な食べ物を自分で作って食したい、仕事に追われて 自己喪失そうなところから脱出したい、そんなこんな思いが積み重なっていた。

気が付けば広島牛田教会に 13 年間勤務。10 年一区切りで転任するべきだと考えてきた。それが 3 年も経てしまった。そして気が付けば 55 歳。人生の峠で一番高いところ。これからは下り坂。今を逃せば可能性はどんどん先細りになる。残された人生はこのまま続けていいのか？と問うと「いやいや死ぬまでもうひと仕事したい」との思いに駆られる。その「やりたいことリスト」を書き出すという「バケッリスト」の上位に挙げられていたのが「農的暮らし」であった。赴任先の教会や幼稚園になんの不満も問題はなかった最高の職場であった。

連れ合いに「来年 3 月末で辞職するという辞表を出してもいいか」という私に「いいよ」との一言。即答が返ってきた。そこで決断した。

■辞任・移住（仮住まい）そして定住

1998 年 3 月末 広島牛田教会辞任。4 月 中山間地域へ移住。借家借地の農家に「共生庵」を開設。

そのうちに自分たちで自由に使い改築・変更・開拓できる田畑付きの農家が欲しいと願うようになった。1 年 8 か月の仮住まいを経て 1999 年 11 月 広島県双三郡（現在三次市）三和町敷名 126 へ。農家・山林・農地（当時は借地）を取得し、移転。

広島で培った人的財産を大切に人間関係が切れてしまわないような距離。広島市内から車で 1 時間半～2 時間位の移転先を希望。何か所も時間をかけて候補地を探してきたが結果的に広島県のほぼ中央の中山間地域で自分たちの身の丈に合った理想的なところを取得できた。

最初からどこからも援助を受けるつもりはないので、完全に無収入。そこで連れ合いが昔取った杵柄をとって「薬剤師」として働く。カビの生えた(?)古い免許が役に立った。55 歳にして車で 30 分の総合病院の薬局責任者に迎えられる。

2008 年、車で 25 分の日本キリスト教団甲山教会（共生庵から一番近い教団の教会）から要請を受けて主任担任教師(8 年間)となる。

2016 年 同教会に後任が与えられ、辞任。隠退教師となる

2019 年 共著『十字架のない教会』―共生庵の歩み―』（かんよう出版）出版



■食を通して畏怖を感じる

私たち夫婦は母親と共に一年八ヶ月の仮住まいの後、理想的な拠点を与えられ、現在地に定住して23年を迎えている。今は2枚の田圃と2枚の畑を入手出来て、お米（三反余り）と野菜作りに挑戦している。色んな事を親身になってお世話下さる農家に進められて、すぐにお米作りに挑戦した。何の体験もないずぶの素人が、トラクターでの耕運や代掻きをはじめ、すべてをていねいに教わりながら手がけた。何も知らない頭でっかちな私たちは同じやるからにはと、最初から格好つけて今思えばとても恥ずかしい「完全無農薬有機栽培」にいどんだ。すぐにヒエなど多くの雑草と共生する稲を見ることになる。

有機農法が「自然農法になってしまった」といいながら、それでも田押し車や素手で腰を曲げて雑草拔きに時間を費やした。自然の営みは大変活発で、取っても取ってもはえ出てくる雑草に追いつかず「放任農法」に切り変えざるを得なくなった。そうして最後はもうどうにでもなれ！と「放棄農法」へと変遷していった。

牧師の田んぼなのに（？）垂れるはずの稲穂はすべて「頭が高く、不遜な姿」なのだ。か細い一本の茎につく米粒がとても少ない。しかもイノシシの訪問を受けてずいぶん食い荒らされている。そんな状況の中での収穫であった。一反あたり農家の平均的な収穫量の三分の一しかなかった。それでも、放棄までしてしまった私たちの前には、30 kg入りのコシヒカリ19袋が積み上げられたのである。わが家と来訪者用の一年分を確保して、残りをかなりの共生庵会員にお裾分けすることができた。ふっくら丸みをおびた普通米と違い、わが家の米粒はほっそり目で「ダイエット米だ」と自嘲的に勧めている。初めての稲作で580 kgのお米を前にしたときわたしは脳天をハンマーで殴られたような衝撃を受けた。それは、新しい生き方をめざして都市から田舎に移住して、生まれて初めて稲作に挑戦した収穫の

時のことである。「何を思い違いしているのだ！」といわんばかりに有頂天になっている者に打ち落とされた鉄拳だった。自然の摂理はすごい、神様のご配慮は人の思い上がりを打ちのめし、心底謙虚にさせる恵みを痛切に思い知らされた次第である。

体が震えた。それは収穫の喜びの故でなく、創造主への畏怖であった。「おお、この俺がこれだけのお米を作ったのだ」という感激などは吹っ飛び、これは間違いなく神が成長させ、稔りを与えてくださったものだと思い知らされた。文字通り膝を屈し、大地にへたり込んでしまった。このスタート時点の体験はわたしにとって忘れがたい共生庵での生活原点となっている。

裏山からの名水の湧水でできたものだけに、その味は格別である。この味を一年中楽しめるのだが、そのことを通して「いのち」が誰によって支えられているのかを常に思い返すことができる「食」となっていることは、本当に幸せなことである。

■「食」と「いのち」のつながりを

我が共生庵は「農・自然・人」をキーワードに里山農園を開設し、生き方を模索する人が自然の中に身を置きながら、土に触れオーガニックな生産物を食することを体験してもらう。そうして少しでも人間性回復を願う。わが家の生活用水（名水の判定）は裏山からの湧き出る水ですべてまかなわれている。生活排水はそのまますぐ前の川に直結し、日本海へとつながる。洗剤をできるだけ使用しないで、汚れやゴミはゴムヘラでそぎ落とし熱湯でそそぐように徹底している。駐車場を整備したとき、重機で小さな池でビオトープを作った。

湧水を利用したものだが、蚊の発生を防ぐために川から取ってきた小魚を放した。やがて小魚はそこに住みはじめたトノサマガエルがゴイサギなどに食べられてしまった。しばしば蛇がカエルをねらっている。それをにらんでカラスが上空を旋回するというふうに、小さな池をめぐる食物連鎖が見られ、いのちの循環を見ることができる。このような構図は畑の野菜の中でも裏山でも発見できる。そんな「見えるいのちのつながり」を見ながら、「食」を考え「いのちと生き方」を語り合える場でありたい。それにふさわしい共生庵・体験農園であるようにと整備に精を出している。

それでは次にパワーポイントで映像をご覧いただきながらお話を進めていきたい。

■「共生庵の3つのキーワード」

3つのキーワードから。一つは「農・自然・ひと」、それから「Retreat House」、もう一つは「地球市民共育塾」という言葉です。

地域にキリスト教の牧師が入り込んできて何をするのか、どうするのかということを経験した人たちがいぶかしげに語り合っていた初期のころのことである。若い農家の人が、私のことを調べて「この人は変なことをする人ではない」と説明した中で、「地球市民共育塾」というんだから何か教えてくれるんだろうから問題ないんじゃないかということに収まっ

たという経緯があった。また私を「どう呼んだらいいのか？」とみんなが言う。それまで何となく先生と言われていて、誰かが「先生と言っといたらいいじゃろう」ということで、それで「塾と先生」で収まってしまった。牧師、広島大と広島女学院大学の非常勤講師をやっていたこともあって、それはあえて否定しないでそのままにしている。

共生庵はだいたい広島県の真ん中に位置し中山間地域といわれる農村エリアに位置している。山岳地帯でも平地でもない、その中間を中山間地域の里山という。後ろは山で、前には川があってその中間に農家や田畑があってというそういう立体的な立地状態にあるのが里山である。私が移住した時の三和町人口は3,800人だったのが今は2,600人に、世帯数は1,270戸。今も過疎化高齢化が進んでいる地域社会です。

- * 共生庵の建物は最初から3つ。中央が2階建て母屋。現在は、ここを明け渡して、全館自由に使ってもらえる研修棟になっている。。それまではこの左側にあった2階建ての家が、老朽化して、平屋の家に建て替え、現在我々夫婦の住居となっている。
- * 母屋玄関の入り口にこういう4つの組文字が彫り込まれた看板と「この組文字が解けぬ者は家に入るべからず」という説明板が掛けられている。これを無視して家に入る人「この禁を犯した者は、これが解けるまで帰ることは相ならぬ」と冗談を言ったりしている。
- * 真ん中の「口」が共通項で上から時計回りに吾唯足知（われただたるをしる）と読む。京都の禅寺にあるようだが、これを通して来訪者に神の恵みは十分である「我が恵み汝に足れり」というシンプルライフのメッセージを投げかけている。
- * これはウーリーシンキングという開発教育のワークショップ。森林ボランティアの人たちに裏山調査を依頼し、樹木に名札を付けた。その後、そこで何を学ぶことができるかを考えるワークショップをしたもの。色の違う毛糸でそれぞれに関係性をどんどんつないで行くとききれいな蜘蛛の巣ができます。そういう作業をしながら、振り返りをします。「ここで木が1本倒れました」と想定して、木の人思い切り倒れる。すると張られたネット全体が引っ張られ、自然界の全体がすべていろんな絡みの中に生息していることを実体験するようなワークショップだ。

■「日本で最初のロケットストーブ」

- * この写真はロケットストーブという非常に興味深い、大きなドラム缶で作るオンドル風の自作暖房装置です。
- * これが日本で最初に完成した自作の歴史的な第1号。不思議な効率の良いクリーンな燃焼をするこのストーブは、多くの人の関心をひきつけ、ここ広島共生庵から日本中に一気に広がりました。
- * マニュアル本の翻訳本（1,200円）を製作販売した。3刷まで売れて利潤が出た。「私はトーブだ」と銘打った大きなイベントを開催、そのためにアメリカと韓国から講師を呼ぶことができた。

- * 普通、熱気は煙突ですぐに外に排出するが、このドラム缶の下側から出てくる熱を地面に這わせた煙突に通します。その周りを石と粘土で囲い蓄熱させベンチを作る。「幸せはお尻からくる！」と気持ちのいい温かさでここを離れられなくなる。素材はリサイクルのドラム缶や土や石でエコロジカルに作られ、高燃焼のため煙はほとんど出ず、少量の薪でクリーンに高熱を出す。

その他、ごく普通の農家だったところに必要になってきた設備を次々と作り多くの付加価値を付けてきた。

- * ピザ窯、炭窯。ツリーハウス、ログハウス、ファイヤープレイス、グリーンチャペル等々。それらはいずれも業者などに依頼することなく自前のプロジェクトとして参加者を募り、講師を招き学びつつ実現してきた。
- * 共生庵の前にある川の両岸には6.9kmの長い 1,000 本の桜並木。これが満開になると見それは見事なものの事。6月にはホテルが飛び交い庭先まで遊びに来てくれる。
- * また星のソムリエの専門家を交えて夜空の星の観察も企画。その際行われるパソコンによる星座をめぐる宇宙探検講座が好評である。

■「地球市民共育塾」の豊かなプログラム

以上のような様々なプログラムを総称して、「地球市民共育塾」と呼んでいる。その中身は、農・自然・人との出会う実体験教室だ。とにかく「食」や「農」を中心にプログラムを組んでいく。

- * 広島大学のマレーシア留学生たちが農作業に参加。体験しただけで帰るのではなく、そこで何を学んだか、帰ってから何をするかというようなことまで含めた学びを深める。様々な教材を使ってワークショップの実体験とグループ討議をする。
- * イスラエル・パレスチナ・日本人の高校生による平和ツアーで彼らが広島に来た時、日本の農村を体験してもらおうと企画され、共生庵で宿泊研修を引き受けた。その時に体験した「対立から協調」のワークショップは大変興味深い学びとなった。われわれが思い付かない多様な意見があって深い気付きが語られ記憶に残る印象的なプログラムとなった。
- * ワークショップの扱うテーマは、食糧の問題・平和・国際支援・ジェンダー・自己啓発・人間関係・自然環境・公害問題等々。
- * 共生庵は一体何をするのかというミッションは、農と自然にとにかく触れ／、オーガニックなお米や野菜を食し、田圃・土・農作物畑・山林に身を置き学ぶ／そこに集う人と人とが交流する／お互いに影響を及ぼし合うことを体験するプログラムである。
- * さらに目的のもう一つは、そのために必要な場所とふさわしい環境、それと内容あるプログラムを整えて提供して迎える。そうして一緒に非日常の生活を共にするという事である。
- * これは私が属している日本基督教団の西中国教区「農を語る会」の協議会がここで持た

れたときのもの。いろいろ農的な関心と具取り組みを提言して誕生。同会の特別の委員会ができ、予算が付くようになった。しかしいまだ「語る会」でしかない。農を体験するということまではまだ到達していない。

- * これは広島の高校生が修学旅行でサラワクに出かけるグループ。彼らが、アジアの農村を訪問する前に日本の農村を知って出かけようと企画した体験プログラムである。
- * ニホンミツバチがこんなに密を作ってくれて本当に感動した。この時ばかりは「自給自足」という言葉を実感！
- * この100kgを超える大きなシカは共生庵の畑で捕獲された。立派な角と頭蓋骨は剥製になってこのホールの壁に掛けられている。
- * *日々苦闘しているのは野菜、果樹、稲作などに被害をもたらすイノシシ、タヌキ、アライグマ、ハクビシン、ヌートリア、キツネ、ウサギ、カラス、ひよ、モグラ、スズメ等々である。彼らと知恵比べをしながら共生関係を模索している。
- * これは地元のNPO 法人善菊会の理事会です。理事会の運営から始まってワークショップを取り入れた連続講座をしたときのもの。

■「リトリートハウスとしての役割」 ひきこもりの方に希望

- * 共生庵は「リトリートハウス」という別名を持っている。／この「リトリート」を辞書で引くと「退く、後退する、逃げる、退却する合図、避難する、静養する、隠れ家、さらにカトリックでは黙想の期間のことをリトリートという」と出てくる。「共生庵はまさにそうだ、とにかく逃げてきても隠れてもいいから共生庵にいらっしゃい！」と言っている。
- * 心や頭を横に置いてゆっくりしてもらおう時空間となればと思う。
- * 非日常性に身を置き、ばらばらになっている心や体をホリスティックに統合していくという、一つのものにできればと願っている。そこにはおのずとスローフードとかスローライフやそこから有機的な循環を考えるいろんな絡みの中でわれわれは生きていることに気付いていくプログラムを展開している。
- * この画像は共生庵会員の発達障害児の子どもたちの塾（広島市内）から自分たちの自然のフィールドが欲しいと要望が出されてきたハーブ園。「ハーブならあまり手をかけなくてもある程度できるからやってごらん」と提供して実現したフィールドである。実に豊かな感性を持っている子どもたちからずいぶん多様なことを教わった。
- * これは「引きこもりの親の会」の集い。引きこもった本人の青年たちが来てくれたら一番いいけれども、彼らは出てくるのは難しい。結局、疲れている親たちにリフレッシュが必要だと日常から抜け出して、いろんな悩みを語り合うという集会だ。ある時、広島市内で彼らの研修会で講演したことがきっかけで、「こんなリトリートハウスがあるからいつでも利用してください」と言って実現したケースである。
- * 海外に広く視野を広げておきたい。こういうリモートエリアにいと、何かにつけとか

く不便であり、内向きになりがち。いつも私は地球規模のいろんな課題や人たちをグローバルに意識して過ごしたいと思っている。外国の人の訪問を受ける機会があれば、何をさておいても彼らを優先して受け入れることにしている。

- * これは神戸にある PHD 協会の研修員の人たちが、毎年ここまで来てくれる。彼らから報告を受けたり、この地区の人にホームステイをお願いしたり、相互交流と学びを共有します。

■「田舎を引っ込み先」と考えたくない

- * 決断して農村エリアに移住した初期のころは、お前はまだ若いのにもう田舎に引込むのか、引退したのかと誤解をされることが多かった。しかし田舎を引っ込み先だというふうに考えるのは農村の方には非常に失礼だと思う。私はオーシャンパシフィックに悠々と船出していくという感じで、とても楽しみに期待を持ってこの田舎に入り込んだ。確かに、そういう魅力ある場所がたくさんあって、ユニークな優れた人材もたくさんおられるのだ。
- * 米国オレゴン州に行った時に教えてもらったロケットストーブがらみで、お世話になった教会の方々から、今度は、こちら側に来たいというときのシーンだ。情報や物だけでなく生身の人間の交流があるということは素晴らしい。
- * この方々は、韓国の牧師で1泊2日の研修に来られた。牧師が農村に定住し、農民と一緒に生活をしながら宣教活動を推進していくトレーニングセンターの方々。意識がとても高い人たちでつよい刺激を受けた。
- * 「Uターン、Iターン、Jターン緩やかネットワーク」の発足会。この地区にもずいぶん多く移住している。3・11絡みで原発の被害を逃れて新天地を求めてやってきた人たちはこの周りにもいる。その人たちに空き家を紹介するようなことも手がけている。
- * サラワクで日本語熱が流行して日本語教師を送ってほしいと言われて、1人、2人紹介したことからはじめて、「サラワク日本友好協会」という組織が発足。今まで毎年途切れることなく日本語教師のボランティアを派遣している。(通算20人ぐらい)

■「十字架のない教会」について

私は「十字架のない教会」というキーワードを持ってる。元来ここを礼拝堂にし、この建物の上に十字架を掲げて教会にするという意識は初めからもっていない。でも私は、現代宣教の最先端を行っているという自負を持っているつもりだ。これこそ現代社会において宣教の一つのありようではないかと問題提起をしているつもり。既成の教会をいたずらに否定したり批判するということではない。それはそれで認めつつ、でも私は少し違うことをやるよというのでやっているわけだ。ここではキリスト教だ、牧師だということを公言しながらいわゆるキリスト教の精神で、全ての人を受け入れる心意気である。この地域は浄土真宗が強いところで、非常に熱心な仏教徒が多い地域。そんななかで URM や NCC のキーワー

ドでもあるエキュメニカルな運動や関わり方を大切にしている。

3つのキーワード、農と自然と人との触れ、出会って、その中で自分を見直してみる。特に農や自然に触れることの中で、人間を超える存在があるということに気付かされることを願っている。人間はひとりだけで生きていけない、人間を超える大いなる存在があるということが分かってもらえればという思いです。ここでは教会のグループが修養会として礼拝や講演会をまもることもある。それにはもちろん応じています。

- * グリーン・レガシー・ヒロシマという広島市の平和活動をしているグループ GRH。原爆樹木の苗や種子を再生させる活動を展開しています。原爆の焼け野原から生き延びて芽を吹いた樹木に平和の願いを込めて日本国内や広く外国に送っています。そこから広島市役所前で生き延びた桜の木をもらって植えた被爆2世がこの画像です。
 - * ハーブのレモングラスです。これはわが家の数少ない販売品「ハーブティー」です。
 - * 自慢の自家製ピザ窯。共生庵のピザは常に好評です。これは隣町公民館のリピーターの子どもたちが再度やってきました。
 - * 農村伝道神学校卒業生が実習に滞在。唐箕(とうみ)を使ってお米の分別をしています。
 - * ツリーハウスはほとんどお金を使わず、間伐材や廃材で大きな栗の木に絡ませて全員で自作しました。
 - * スタードーム。細く割った竹を組み立てるときれいなドーム状のものができます。これは教会や幼稚園で作って置いておくといいですよ。
 - * ベジタリアンで玄米にすごく凝っているこの女性は、広島に初めてユニタールの国連事務所を持ってきた米国人女性。自分で作ってみたいと共生庵の田圃の一面を提供して見よう見まねでオーガニック米に挑戦している。
 - * *これが炭窯、半分以上灰になるけど、炭まで自給できたら充足感があります。木酢液もちゃんと取れます。
 - * JICA 研修員が宿泊研修で来訪。主に国や民族間で対立、抗争している人たちが、それをどう克服するかということを学ぶ平和プロジェクト。それを3回やりました。1回やったら3年継続してできる。企画者中田豊一さんのおかげで、実に多くのことを学べるとても楽しい受け入れプロジェクトが体験できました。アジア、中南米、アフリカ諸国の方々が、みんな違う所からいろんな価値観・宗教・生活習慣等を持ってやってくるので、それはとても興味深いものになります。
- パワーポイントの長い説明で時間が無くなってしまいました。もうしわけありません。

■「まとめのお話」

現代社会では、小さな子どもから引きこもり青年やご老人も含めて、みんなどこかに何らかの形で体と心のアンバランスを抱えています。その修正はどこでどうすればいいのだろうか。そういうものをトータルにホリスティックに、統合的に修復・回復させ癒やすことが求められている。そういう問題を語り合える場所と時の提供ができればいいなと痛感して

います。そこで共生庵の文字を、心と体のひずみを矯正する、正す「矯正庵」という表現にしたほうがいいのではないかと思います。

それには何より、山があって緑があって土があってオーガニックな安全な食べ物があれば、それが一番だ。都会の街中では無理ではないかと限界を感じて街中の教会を抜け出したわけです。そんなことがあって、今、見ていただいたように、最終的に身の丈に合ったこういう環境を与えられて、試行錯誤しながら自分のペースでここまで自由にやって来られた。大変幸せです。いろんなしたいことができるスペースがあちこちにあった。そういう人材や仲間もいて、指導を受けたり助けてもらったり人がたくさんいました。13 年間広島であたえられた人間関係は私たちにとっての財産です。それが切れない範囲で仕事をしたいと思っていた。日帰りができて、泊まろうと思ったらすぐ行けるという車で 1 時間半ぐらいまでの所です。そのような所を探していたのが、中山間エリアというこういうような所だったわけです。

主題に沿ったまとまったお話になったかどうか心もとありませんが、ご容赦ください。これでお終わります。ご清聴ありがとうございました。

鹿野（司会）：先ほど、共生庵の名前のお話があったんですけれども、昨夜から来ている、今、荒川さんがおっしゃった 55 歳、トップをちょっと過ぎた者たちが大勢いたこの場の名前を今日から「ちょうせいあん」にする、長生庵というような冗談ではない本気のような話も出ておったところでございます。荒川先生どうもありがとうございました。最後の交流の時に、質問、それからもうちょっと聞きたいところを出していただきたらと思います。

発題①「農：基督教（神学）以前—農村伝道神学校から—」

池迫直人さん（いけさこ なおと、生田教会牧師・農村伝道神学校兼任教師）



皆さん、こんにちは。お久しぶりの方もこんにちは。荒川先生には農村伝道神学校の卒業生を受け入れてくださり、当時を思い起こしながら、ありがとうございました。さっそく始めたいと思います。飛田さんから送ってくださった資料を元にお話しを差し上げたいと思います。少し書き加えたものを共有させていただきます。

■なぜ基督教が農に関わるのか

皆さんご覧のとおり、私自身は略歴のところに書きましたけれども、農家の出身でもありませんでした。そして 1960 年に生まれた者として、当時、手塚治虫さんの「鉄腕アトム」がすごくはやっていて、私も全巻そろえて読んだ記憶があります。そんな影響のもとで、原子力に関心が向いて、原子力船の船員を養成する神戸の学校に進みました。

そこを卒業して、一般の商船に乗って、3 年半、主に東、東南アジア経由で中近東の航路が多かったんですが、そういった世界中の状況というのをじかに体験して、（アジア太平洋戦争にまつわることなど）何の知識もなく、放り込まれた社会の中で、挫折しました。

そこから再開するあたりから、農との関わりが始まりました。実家の近くに、山を開いて始めた有機農法をいとなむ友人ができました。その機縁も教会を介してでしたが、そこから農業への関心が開かれていきました。当時、いろんな出会いがありまして、もうお亡くなりになった西尾市郎さんとか、菅原一夫さんというような、先輩の牧師たちを介して、農村伝道神学校（以下、ノウデン）に進学する道が開かれました。

私がノウデンに入学した年、星野正興さんがカナダの宣教から帰ってきて、農場の担当になった年でした。星野先生も 1 年生、私も 1 年生、そして、農業実習に阿蘇敏文さんがいました。阿蘇敏文さんも都会での宣教に行き詰まりを感じて、星野先生の下で農業実習を一緒に私と教えを受けた、そんな関わりでした。ノウデンを卒業後、アジア学院の非常勤、道北

クリスチャンセンターで五十嵐紀子さんとの出会い、地方での主に農を軸とした出会いの下に、2005年にノウデンの教師として母校に戻ってまいりました。

その直前、2000年にノウデンは財政危機を迎えます。この時、3.5畧の校地を売って都心に本校舎だけを建てて、そこで座学を行い、実習などを地方に委託するようなカリキュラムに変更しようという構想でした。ところが、売却を思い留まって今の現在地に留まるという決定をしました。そういう経緯を経て、教育の目標にも、「農に関わる・・・」という言葉が第一に掲げられているので、よほど「農」に力を入れるのだらうと思って赴任したら、実際はかなり開きがありました。

ここで教育目標には、農に関わるというのが第一項目に、以下、戦争責任、大地、共同性、エキュメニカルな神学と、この4項目が掲げられています。どれ一つを取っても、大きく重たい問題ですから、そんなにできないはずだと思われました。ここに至る、ノウデンの歴史について、なぜこのようになったのかという経緯を少し紹介させていただきます。

■＜農の変質＞農村神学校の歴史：「本校の使命」とその前後の経緯から

1948年戦後に、皆さんご存じのようにカナダ合同教会の支援サポートを受けて、中央農村教化研究所というものが立ち上げられました。この中央農村教化研究所が立ち上げられたのは、当時戦後の日本の農村人口が7割近くいたというところから、農村へのミッション、これは校名に「教化」と書いてあるように、エバンジェライズ、キリスト教に改宗させるという志向を持っていました。そういった理念のもとに立てられましたけれども、1951年校名「農村伝道神学校」に変えました。1971年、ちょうど教団でいうと万博闘争とか東神大の問題とかが起こった翌年です。保育科の廃止が決定されました。ここは設立当初の教師のひとり木俣敏さんという教師が、農伝を評して、「農村的共同体である」と位置付けたんです。今、3.5ヘクタールになっている敷地は、この3倍ありまして、10ヘクタールぐらいの校地を持っていた。そこに搾乳牛が20頭とか、豚が50頭とか、訪問された方はご存じでしょうけれども、アジア学院がすっぱりそのまま入っていたような状況です。

なぜ財政難になったかといいますと、教団の機構改正です。1967年に戦責告白が出されましたけれども、鈴木正久議長は、北米からのインターボードを介して、農村伝道神学校に伝道委員長だった木俣敏先生を通して、農伝に多額の献金が入ってきていたわけですが、それがいきなり機構改正とともに農村伝道委員会が廃止になり、そして献金がこなくなったので、あっという間に財政難に転落しました。当時、赤字を出していたのは全てのコース、保育科も、それから東南アジアコース、現アジア学院も、どれも赤字を出していたんですが、一番赤字を出していたのは神学科であるにもかかわらず、神学科だけを残して他を廃止した。やはりそこにキリスト教プロテスタントのある志向性、そういったものがあると思います。保育科が廃科になると同時に、初代の東南アジアコースの代表者だった高見敏弘先生は、現在の西那須野にアジア学院を創設した。これは福本さんという農伝の卒業生が西那須野教会という所で、地道な宣教活動のゆえに、地域からの信頼を得て、アジア学院の敷地を用

意することができるということでした。この時期、学生はおもに保育科廃止に反対し、反ストをした学生とか、事実上の退学措置を宣告されたような学生がいて、教師、つまり保育科や東南アジアコースを廃止に追いやった教師たちは、一体その背後にどんな理念があるんだということを問われました。教師が総辞職したりなど、大騒ぎの後に、後を受け継いだ教師たち、柏井宣夫さん、雨宮栄一さんとか、東海林勤さん、下田洋一さんとか、そういった方々が教師をしながら、1983 年、「本校の使命」というものを出しました。これを要約しますと、農村というのは長く経済的に虐げられた、周辺化された地域である。そういう地域へのミッションが、今度はアジア、アフリカ、そして被差別の立場にある人たちを覚えたうえでのミッション、宣教というものが、本校の使命であるということです。これについては、学内でもいろいろ批判がありまして、それは、農村を切り捨てたということの言い逃れにすぎないというような内部での批判もあったようです。

いずれにせよ、そういう経緯を経て、この時期ノウデンには、在日大韓基督教会からの学生たちもいました。(当時、在日大韓基督教会には神学校がありませんでした) 私が 1987 年に入学しましたけれども、在日大韓基督教会から先輩、後輩に 4 名ぐらいの友人たちが学んでいました。そういった渦中で、被差別部落出身であることを学内でカミングアウトした友人がいたりなど、「周辺化された」という立場から、そのことを宣教の使命と考えて学校に入学してくるというような学生も、多くこの時期にいます。

しかしながら、当時、農場は荒れ放題でした。宣教における社会的な関心が高まると同時に農場は荒れ放題になるという皮肉な状況がありました。2000 年の財政危機を乗り越えて、農というものを学校の第一の課題に据えましたけれども、荒れた校地を少しずつ整備しながら今日に至っております。

さて神学校ですから、どうしても座学が中心になりますので、私は農村伝道論とか、農業概論というものを担当しはじめました。この時、キリスト教神学の中に農業というものをしっかり位置付けるべきだと思い込んでいましたので、ずいぶん葛藤がありました。しかし実際には、入ってくる学生の関心もそれぞれで、農業に関心がある学生もいるかと思えば、全く関心のない学生もいる。それをキリスト教神学の中に位置付けるということで、農という課題を中心に持ってきたいと思っておりました。いまでは、ようやく無理があったと言わざるを得ないという理解しています。

ここで確認したいのは、校地を 3 分の 2 を失ったということは、例えていえば体の 3 分の 2 がなくなって、頭ばかりになっちゃった。しかし、これを残念ばかりだともいえません。わたしが在学するはるか以前、アイヌ民族出身であることをカミングアウトなさった先輩がおられますけれども、そういう少数者の出自の人が、農場中心の時代には、出自をあきらかにできない雰囲気がノウデンの中にあったと聞きました。これについて、一体どういうふうに折り合いをつけていくべきかというのは課題であり続けています。

もうひとつキリスト教会の中でも、皆さんもいわゆる一般的な教会の中で直面している問題です。アリスター・マクグラスさんの『キリスト教の将来』で、世界中のキリスト教界、

その教勢をめぐる問題について考察されています。言語中心のプロテスタント教会、特に先進諸国のプロテスタント教会の教勢が下がっているのです。ノウデンでは、残された農場と、農業関係の実習とか、実習を受け入れて下さる農家がいったりとかということで、偶然それ（身体）を、維持し続けてきました。関連することとして、近年の「霊性」への関心の高まりとともに、神学教育の軸として、瞑想と実習と座学、これら三つを神学教育の三つの要素とする。これはまだ、始められたばかりです。

ありがとうございました。

■映像視聴（部分） 「BS 1 スペシャルーコロナ新時代への提言 2 」(省略)

■質疑応答

飛田：ありがとうございました。30 分の報告でした。これから 10 分の質疑応答です。よろしくお願いします。私のほうから一ついいですか。レジュメを見ていまして、『マイ・フェア・レディ』のことでています。つい先日またこれをネットで見ました。ヘップバーンが大好きなんです。このレジュメに『マイ・フェア・レディ』池迫さん、コメントをお願いしていいですか。

池迫：『マイ・フェア・レディ』というのはキリスト教の歴史から、ずいぶん批判的に見れる映画ですね。あれは農村囲い込みで、農村からロンドンの近郊の炭鉱に出てきた人たち、ロンドンの下町のコックニー地方、そこで育ったオードリー・ヘップバーン演じる主役が、ジェントリーの中産階級の教授から言語矯正を受ける。地方から出てきて方言丸出しの人たちがつくったコミュニティーですね。当時、例えば民衆史の歴史を読みますと、夫婦で炭鉱で働いている人たちが、赤ちゃんを眠らせるのにジン・トニックを飲ませるとか、トイレとか下水がないので、壺にした下のものを 2 階から路上に投げ捨てる。それでコレラとかいろんな疫病がはやったという衛生環境の悪さ。そういう貧しいロンドンの下町地域に言語矯正をする、支援する、あたかも良いことをしているように見える教会の人たちの、今日でいう上から目線を批判的に見ることができます。

そういう問題は、農業の起源にまでさかのぼることができるということが最近分かりました、つまり、古代メソポタミアの農業の起源のことは割愛しました。レジュメに項目ばかりの、てんこ盛りになって申し訳ありませんでした。

李民洙：一つ質問があるんですけども。東京から広島農村地域に引っ越しして 3 年目になります。もともと聖公会の司祭なんですけれども、農村伝道神学校という、根本的な一つの質問をしたいと思うんですね。今の農村地域は人口が減っていく、高齢化していく、教団からの支援がなければ自立することもできない状況に置かれつつあるわけです。農村伝道神学校で勉強してらっしゃる学生たちの中で、農村地域に入ってきて牧会したいという

希望を持ってらっしゃる方々はどれぐらいいらっしゃいますか。

池迫：それも、入学者の関心がまずそこにあるのかという大前提がありますので、どれくらいという一般化した数字は言えないんですけども、例えば、次年度春に卒業するうちの4人在学中のうち、3人は農村に行きたいと思っている。しかし、ある年にはそれが0ということもある。ですから、その時しだいという答えしか言えないです。

発題②「農：北海道での農場経営から—三愛塾・道北センターとのつながり—」

五十嵐紀子（いがらし のりこ、北海道士別市上士別町／五十嵐農園）



■私が住んでいる士別市

よろしくお願いします。初めましての方と、お久しぶりですという方といらっしゃいます。私のレジュメはすごく簡単で、あっという間に終わるのかと皆さん思っただけですが、そんな簡単には終わらないかもしれません。取りあえず30分の中で話してみたいと思います。

これから話すことは、私の人格、そして人生を形成した上で、三愛塾がとても深く関わっているという証だと思うのですが、三愛塾との約50年にわたる私の歴史を語るのですが、今までの方のようにパワーポイントがあるわけではないので、皆さんの想像力をすごく発揮していただきたいと思うのですが、基本となる想像力のデータベースを提供します。

皆さん、想像してください。私が住んでいる士別市というのは、北海道の旭川から北に60キロぐらい行ったところにあります。北緯は44度何分とかというところですよ。面積は札幌市とほぼ同じ広さです。札幌の人口は190万人なのですが、士別市は1万9,000人です。除雪の距離、あんまり興味ないかもしれませんが、除雪の距離は約60キロあります。東西にとっても細長い市です。気温は、夏は今年37.2度になりました。最低気温は氷点下36度です。たぶん、体感した方はそんなにいらっしゃらないと思うのですが。積算積雪が一冬6メートルから7メートルです。初雪は平均10月10日すぎに降ります。今年も既に10月の、今から10日前ほどに降っております。最後の降る雪というのは4月の下旬ぐらいです。30年ほど前、私が結婚して10年ぐらいたってからなのですが、5月30日に吹雪になったことがあります。初霜、農作物にとってはとても大事なのですが、初霜が早ければ9月下旬には下ります。今年は10月10日すぎでした。ちなみに、春の遅霜は6月6日に今年はありませんでした。そういう所に住んでおります。だから11月下旬から4月下旬ぐらいまで、とても雪、雪、雪の中で暮らしております。

■仙台から北海道へ

では、なぜ北海道で暮らすようになったのかお話ししていきたいと思います。私は仙台出身です。花や植物が好きなので花屋になりたいなという夢がありましたので、恵泉女学園短期大学、園芸生活学科に1973年に進学しました。そこで初めて、私は聖書と讃美歌というものを手にするのです。私はずっと高校時代も合唱部におりましたので、賛美歌を歌うのがとても好きで、毎礼拝には真面目に讃美歌を歌うために出ておりました。夏休みに校外実習というものがあるのですが、そこで酪農学園に来ることになりました。初めて北海道にその時来たんですが、皆さん想像してください。今みたいに飛行機ではないですよ。夜行列車で上野から青森に行って、青函連絡船で函館に渡って、空が白々と明けて、街々が見えるようになると、それが八雲町なんですね。八雲町というのは酪農が盛んな所なので、そこで目にした、放牧をされている牛たち、それからカラフルな三角屋根の家々を見て、ここが日本ではないというふうに思いました。とても、いっぺんで北海道のとりこになってしまいました。

■「農家はいいぞ、農家はいつも好きな人と一緒にいられる」

酪農学園で10日間、酪農実習をするのですが、そこが私の人生のターニングポイントになったと思います。私たち学生のお世話をしてくださっている先生が、口癖が、農家はいいぞ、農家はいつも好きな人と一緒にいられる、というので、たぶんこの年代ぐらいになると四六時中、相手と一緒にいるというのはとても苦痛な方もいらっしゃると思うのですが、若いまだ二十歳前の学生だった私にとっては、農家はすごくバラ色の人生のように思いました。それで恵泉に戻ってからも、北海道とか酪農という言葉にとっても敏感に反応していました。そんな時、学校の掲示板で、第21回日本農村青年塾開催のお知らせがありました。そこには、「塾長、樋浦誠、元酪農学園大学学長」とありました。樋浦先生は全然存じ上げなかったのですが、元酪農学園学長というだけで、その当時の御殿場のYMCAの東山荘というところで開かれた農村塾に参加しました。その中で、当時北大の教授だった美土路達雄先生とか、農伝で食肉加工を教えられていた井草正先生と出会いました。ちょうどその時、朝日新聞に、有吉佐和子さんの『複合汚染』という小説が連載されていました。

農村塾に参加されていた東京の若い農業者の人たちは、自分たちで食べるものには農薬を掛けないとか、そういう話を普通にしていたので、消費者だった私にとってはとても衝撃的な言葉でした。そしてその時思ったことが、食べるものはできるだけ自分で作るのが一番いいのだというふうに思いました。そして、できれば自給自足をしたいと、その時は思いました。北海道ばかりになった私は、短大なので、2年間の間に8回北海道に来ることになりました。とにかく北海道で生活をしたいということで、恵泉卒業後、私はすぐに、3月20日ぐらいに卒業式なんですけど、23日ぐらいから3日間、農村伝道神学校の、先ほどお話しがあった保育科が廃止になって、寮が空いていたので、その寮に泊まり込んで井草先生の食肉加

工の実習を、3日間かけて行いました。豚半身が肉屋さんから運ばれてきて、そこからのこぎりみたいな包丁と、とにかく小さいよく切れるナイフでバラ肉を、肋から肉を落とすとか、そういうところから始まって、ハム、ソーセージ作りを学び、その後、独立学園を卒業して酪農大を卒業し、瀬棚で新規就農をした西川求さんという方を紹介していただいて、そこで約半年間実習をしました。それが1975年のことです。

■「三愛塾」に参加

2番目にきます。三愛塾（瀬棚、道北）との出会いなのですが、実習をして2カ月ほどたったころ、瀬棚三愛塾が開催されました。いつも瀬棚の三愛塾は夏と冬に、年2回開催されています。西川さんたちは三愛塾のメンバーですから、私は西川さんの子どもたちの子守り役ということで三愛塾に参加しました。ちっちゃい子たちが10人近くいたので、とてもにぎやかだったのですが、会場の後ろのほうで小さな子どもたちといると、なんか前のほうで私の夢を語っている人がいるんですね。自分はこれから実家の裏山を開拓して酪農を始めようと思っている。できれば自給自足のような生活がしたいと。

■『風の子キャディー』

その彼は、その3年前に西川さんの農場で1年間、その後、生出さんの農場で1年間実習生として働き、生出さんのところにいた時に、瀬棚三愛塾で立体農業を推奨し、農民福音学校を主催していた藤崎盛一先生の話聞いて感化され、1カ月間、香川県の農民福音学校で講義を受けた後、カナダで1年間酪農実習をして、それで帰ってきた帰国報告の形で、瀬棚三愛塾の講師として来ておりました。すごく不思議だったんですね。私の夢は誰にも語ったことはないのですが、私が小学校4年の時に読んだ少年少女文学全集みたいな中に『風の子キャディー』という西部開拓の物語があって、それがとても好きで、何回も読んでいました。それで、今まで酪農実習をするにあたって、いろんな農家さんを紹介してもらった時に、酪農家になりたいというと、お嫁さんになってというのは引く手あまたにたくさんありました。でも、ありきたりの酪農はしたくなかったんですね。開拓酪農にとっても憧れていたもので、当時、私の夢をなんであの人は語るんだろうととても気になりました。

今年（2021年）の6月17日に、残念なことですが生田正実さんが亡くなってしまったのですが、生田正実さんの強い薦めがあって、私たちは交際するようになり、翌年の瀬棚三愛塾の中で五十嵐広司との婚約式が、大倉啓太郎先生の司式で執り行われました。それで翌年の1977年の3月、私たちは結婚しました。その時、道北センターの宣教師のハウレット先生も出席してくださいました。

結婚した当時は、前の年に広司が自分で建てたブロック造りの牛舎しか建物がなかったんです。家がありませんでした。15頭ぐらいつなげる牛舎があったのですが、まだ10頭ほどしか入ってなかったので、牛舎の一角を板で囲って、8畳ほどの居住空間をつくりました。平屋なのですが、狭い屋根裏が寝室となりました。そしてその後、4年かけて住宅を自分た

ちで建てました。1年目は基礎をつくり、2年目にセラミックブロックで壁を作り、3年目に柱を立て屋根を掛け、4年目に内装工事をして移り住みました。皆さんここで不思議に思わないでしょうか。なんでいっぺんに建てないのだろうと。

実は、さっきお話ししたように、11月から4月までは雪の中なのです。とても氷点下20度、30度の中で作業をする元気はありませんので、夏の、雪が解けて農作業の合間を見て家造りをしました。この4年間、牛舎には電話がありませんでした。昔の電話の回線方法をご存じの方はとても少ないと思うのですが、農集電話という1本の回線でその地域、例えば10軒ぐらいが1台の電話機を所有する、各家に電話はあるんですが回線は1本しかないということで、あらたにそこに入り込むことはできなかったので、4年後に新しい回線ができますのでその時まで待ってくださいと言われました。なので、訪ねてくる方は前もって手紙を私にくれるか、さもなければある日突然やってくるんです。そしてよく突然訪ねてきてくださったのが、当時、道北センターの職員だった渡辺兵衛先生やハウレット先生でした。兵衛さんとは、とても不思議なご縁があって、それは先ほど、私が参加した日本農村青年塾で知り合った仙台YMCAに勤めていた女性が、自分の姉が士別の隣の名寄市という所に住んでいるので、何かあったら訪ねたらいいと教えてくれたんですね。その方が渡辺兵衛さんの奥さまの志津恵さんだったのです。とても不思議な縁をいただいております。

■「蹄耕法」

3番目、立体農業を実践してというところにいきます。結婚した時、私たちの土地は34ヘクタールありました。全て原野です。原野というのは、北海道開拓が始まった時の原野ではなく、そういう原始林といわれているものは北海道内でもすごく少ないのですが、一度は木を植えてあって、その後、木を切って切り出して、その後に植林をしなかったりとか、何年も前に除虫菊を栽培されていたけれども人手がないので荒れ放題になっていた、農地ではないんですが山林のような形で原野が全て34ヘクタール。これも隣近所から買って34ヘクタールありました。ササヤブに細い木が生えているような所です。そこを毎年1ヘクタールずつ蹄耕法で開拓していきました。

蹄耕法の蹄というのは牛の蹄、耕はおこす、方法の法です。蹄耕法とは、木を切り出してササを刈って、そのササに火を付けて灰を作り、そこに牧草の種をまいて牛を放すというやり方です。牛の蹄というのは偶蹄目といわれて、二股に分かれていることで、土と種と灰をうまくかき混ぜてくれるのです。それできれいな牧草地ができるのです。ただ、切り株とかはそのままある状態ですけれども、土地にも自然にも優しいという農法です。それで家造りと並行して5ヘクタールほど開墾をしました。その時に、子どもも生まれたり、3人生まれましたので、体的にもしんどかったのですが、畜産基地建設事業という、国が8割、北海道が1割を負担してくれる事業がありました。それで残りの原野を草地にし、トラクターなどの機械類、それから格納庫とか乾草庫の建設などの事業を受けました。牛舎は建てませんでした。牛舎を建てると1億円以上の借金になってしまうので、牛舎はうちの夫が

こつこつと自分の「身の長」に合わせた牛舎を建てましたので、それを使おうということで。借金も増えましたけれども、子どもも 3 年ごとに増えていったので、とても楽しい日々だったと思います。

■「何かをつくり出すことは人を寄せる」

1984 年に藤崎先生が北海道各地で講演をするため、わが家にも滞在していただきました。この上士別でも若い農業青年たちに講演をしてくださいました。当時の新聞記事があって、百姓に必要なのは植物的心理。大地にしっかり腰を据え、焦らず、くじけず、根を生やすという話が若者たちに感銘を受けたというふうにありました。1985 年からは私の母校の恵泉の学生と、それから士別市が今から 54 年前から愛媛県立農業大学校の学生の実習先として実習受け入れをしていましたので、その 2 つの学校の実習生を受け入れはじめました。それ以外にも、わが家には結婚した当初、本当に狭い牛舎に、私の母教会は仙台の東一番町教会なのですが、その青年たちや、弟の友達が夏の間、本当に狭い所でどうやって寝泊まりしたのか今はちょっと定かではないぐらい記憶が薄れているんですが、とにかく家造りを手伝ってくれました。

何かをつくり出すことはすごく人を寄せるのだなというのを、その時実感しております。その実習生の数は、延べ 300 人は超えています。ここ 2 年ほどはコロナの関係で実習生が一人も来ておりません。1987 年に、酪農一本だったのを、やはり借金の返済のためなのですが、草地だった所を畑に変えて、ビートという砂糖大根、畑作物を取り入れはじめました。その数年前から、この辺りは野生のラズベリーがあちこちに生えているんですね。ということはラズベリーの適地だというふうに私は考えましたので、そのラズベリーの栽培を始めました。それでたくさんの種類のラズベリーをつくり、ジャムにしたりして、お土産で出す、それからいろんな所に売ることもあったのですが、そういう形を取っていきました。

■34 ヘクタールから 76 ヘクタールへ

1988 年からは、実習生が来るとお土産を渡すのですが、お土産といっても自分の所で取れたジャガイモとかカボチャとか、それこそジャムとかなんですが、そうするとおいしい、もう少し欲しいということがあり、友の会制度を立ち上げました。飛田さんは 1993 年に農村セミナーの研修でわが家にホームステイをしてくださって、その後から今までずっと友の会に参加してくださっています。本当にありがとうございます。

1994 年ころから、私は昔取った杵柄というか、花屋になりたかったがためにフラワーアレンジの講義をずっと受けていましたので、それなりに人に教えることができましたので、ドライフラワー、結局、冬の間、生花はしばれてしまうのです。しばれるという言葉 皆さんお分かりになるかどうか分からないのですが、凍ってしまうのでドライフラワーを飾るのはいいんじゃないかというので、ドライフラワー作りを教えはじめました。また、地域のまちおこし団体、上士別をきずこう会というのがあるのですが、その地域での仲間づくりな

ど、家から外に向けての活動が増えていきました。このころになると、後継者のいない農家はどんどん離農していきます。でも、必ずそこには買い手がいるのですが、なかなか見つからず、わが家も4軒の離農農家を購入することになりました。それで34ヘクタールから始まったところが、その当時は76ヘクタールになっています。池迫さんがよく来られたのはこのころだと思います。道北センターに来られたお客さまをわが家にお連れしていただいて、農作業をちょっと手伝っていただいたりして、とても楽しい思い出があります。

■愛と平和のトマトジュース、「きたごりん」ファーム

4番目にいきます。道北センターとフードバンクの仲間づくりということなのですが、結婚当初から道北センターとは宣教師の先生が、池迫さんのようにお客さんをお連れしてわが家に連れてきてくださったり、道北三愛塾に参加したりと、かなり行き来をしておりました。

そんな中、2003年、その当時、野幌教会の牧師だった渡辺兵衛先生が、渡辺兵衛先生も農村伝道神学校の卒業生だったと思うのですが、三愛精神の出会いを通してという講演会を名寄教会で開催してくださいました。その三愛精神に生きるとは、平和をつくり出す働き人となることであるという言葉があって、その言葉に私のパートナーの広司は、世界各地で数多くの紛争や、罪のない子どもたちが命を落とす現実の中で、酪農業、朝晩搾乳があって他に行くことはできない酪農業をしている人間が、何ができるのかと考え続けていたのですが、これだというふうに思ったそうです。それで、愛と平和のトマトジュースというものを作って、その収益金を平和活動に使ってもらおうと始めた事業です。この考えに道北センターのスタッフであったウィットマー先生とか、藤吉先生に賛同いただき、道北センターとの共同プロジェクトとしてスタートしました。

2004年には、私たち結婚当初、13軒あった農家が3軒になっていました。地域がとても寂しくなってきたこともあり、その3軒で稲作体験農園「きたごりん」ファームを開設しました。きたごりんは、ちょうどその時、オリンピックが開催されていたのですが、なんできたごりんになったかという、北岡さんの「きた」、五十嵐さんの「ご」、それから鈴木さんの「りん」の頭を取って「きたごりん」になったのです。とてもいい名前だと思います。私が付けました。そのきたごりんファームを開設して、20アール、2反の田んぼを23区画に区切って、1区画86平米なのですが、田植え、草取り、稲刈り、それからはさがけと、自分たちの区画を最初から最後まで、自分たちの責任で作業してもらおうというものです。だから夏の間、除草剤は本当に低農薬の除草剤を、一回掛けるだけなので草が多少生えてきます。

■道北センターのウィットマーさん

草取りにまめに来た区画の人たちは、とても収量が上がるのですが、一回も来なかった人はやはりさすが雑草に負けて、お米があまり取れないという経験をしていただいています。それで毎年100人以上の人たちに参加していただいています。特に去年、今年は、コロナ

の影響でどこにも行けない人たちが多かったので、参加人数がやたらと、いつもよりは多かったです。いつも1区画せいぜい、職場で来られると何十人も来るんですが、家族だと若夫婦と子どもたち、みたいな形になるのですが、少年団活動も休止になっていたので、野球少年団に入っているような小学校高学年、それから中学生の部活動もなかったりするので、そういう子たちも一緒に来たので、とても大人数の、外なので離れてはいるんですが、そういう2年間でした。それでちょうどこの事業には最初から道北センターのスタッフが入っております。最初はロバート・ウィットマーさんたちが主にやっていたのですが、カナダからお客さまが来ると一緒にその方たちも田植えをしてみたり、稲刈りをしてみたり。今は藤吉先生が道北センターという看板を立てながら参加していただいております。

この2004年、2005年ぐらいから、娘夫婦が戻ってきて、後継者として就農しました。そのころから私も少し余裕が出てきたので、リンゴ栽培とか養蜂を始めております。2005年6月に、今日そこにいらっしゃる荒川先生ご夫妻とか、会津立農会の斎藤仁一さんたちが、実はわが家に来てくださったのですよね。第5回農の協議会オブションツアーみたいな形で来ていただきました。とてもうれしい出来事でした。2007年には施設園芸のトマトを始めています。100メートルハウス、7メートル×100メートル。1,400本のトマトを栽培しています。このトマトは、その栽培が始まる時に、うちの次男が一時期家に居たことがあったので、次男を働かせるためにも作ったようなものなのですが、このトマトが今のフードバンクにとってもつながっていきます。

■「ちょっと止められない状態」

2012年ごろから、野菜づくりは広司さんが主に担当しています。それで広司さんは種をまいて芽が出るのを見るのがたまらなくうれしいのだそうです。それで袋の種を全部まくんですね。すると収穫はとんでもない量になります。それで地元の福祉施設に届けはじめました。そんなに量は多くないのですが、とにかく無駄にしたくないということで。それで2017年に広司が65歳になったので、農業経営を婿に移譲しました。そこから広司さんが、フードバンクづくりの、フードバンクのための野菜づくりに本腰を入れるというか、熱を帯びてきたというか、ちょっと止められない状態になりました。これも、その年の冬の道北三愛塾の講師であった藤田寛さんという方の話が刺激になりました。藤田さんは長野を中心に25年間もフードバンクを続けてこられた方なのですね。その話を聞いた後に、とても広司さんは興奮状態に陥ってしまいましたので、今も続けています。3年前からは道北センターも協賛の形で、賛同者の呼び掛けや広報を担当してくださっています。

フードバンクのお話をさせていただきますが、2020年度はジャガイモ400キロ、カボチャ200キロ、タマネギ400キロ、トマト60キロなどを各地に送ることができました。今年は、夏の猛暑と雨不足でジャガイモやタマネギがとても小さかったのですが、昨年よりは多く取れているので、多くの所に送っていますし、またこれからも送る所もあります。

うれしいことに、もう一つうれしいことが増えました。それは、私たち夫婦が、地元の小

さい高校なのですが、農業学習のお手伝いを十数年しているんですが、その高校生たちがフードバンクに興味を持って、わが家で作ったジャガイモと一緒に収穫し、それぞれ箱詰めし、送料も自分たちで掘ったジャガイモを学校の職員室とか教育委員会とかで売って、送料を工面して、藤田さんに紹介していただいた所へ送ってくれました。こんなことが少しずつ広がっていくのが、とてもうれしくて、それが私たちのこれからも続けていきたいなというふうな思いです。

■質疑応答

<質問>とても興味深いお話、ありがとうございます。農民福音学校につながる話だと思うんですけども、現在もこの立体農業体制の下で行ってらっしゃるというふうに思ってますかということと、立体農業というような話、そういう話が今、日本の農村地域においても有効だと思ってますか。

五十嵐：わが家の立体農業は、本当は立体農業略図<五十嵐さん、送ってください。飛田>というのがあって、このカメラの前でこうやっても分かんないですよ。送ればよかったですね。10年ごとの略図を書いてあるのですが、最初は牛から出発しましたが、そこに畑が加わり、それから山林も購入したことで、山というのはシイタケのホダ木も置いていますので、そういう山の恵みを受けることができます。それから友の会を設立し、それから小果樹の農場をつくり、ドライフラワーも作り、それから上土別をきずこう会というまちおこしの団体もあって、施設園芸も増えて、今はその立体農業は、一つの軸の回りにベアリングがいっぱい付くような形で行われていくのですが、わが家は忙しいですけども充実はしています。ただ、この立体農業を他の方にやれるかということ、なかなかそれは難しいかなというふうに思います。私たちはやりたくてやっているんで、夢中になってやっているんで、努力はあまりした感じが無いのですが、やはりこれを無理やりやるというのは、体を壊します。答えになっていますでしょうか。

飛田：ありがとうございます。先ほど、五十嵐さんの話に出てきた、私が五十嵐さんの友の会に入ることになったのは農村セミナーはNCC-URMセミナーです。1993年で蔵田雅彦さんが中心となって企画して、道北センターで開かれました。そのとき民泊プログラムで、私が五十嵐さんの所に泊まったんです。そこから私は会員になったんです。

質問（池迫）：農伝でも、温暖化の影響が出ていまして、30年前学生だった時は、ミカンとか全く取れなかったのが、十数年前にミカンを植えたらだんだん豊作になってきたんですけど、五十嵐さんの所ではどんな影響があるんですか。

五十嵐：温暖化はとても感じています。まず、私は本州出身なので、サトイモとかサツマイ

モで育った人間なんですね。だから、それをどうしても植えたいなと思って、この辺は旭川盆地というか、盆地なので夏すごく気温が上がるということに着目し、サトイモとサツマイモはもう 15 年ぐらい前から作りつづけています。今年のサツマイモはお店したいぐらい、フットボールぐらいでっかくなりました。どうやって食べようというぐらい大きいです。それと、2006 年ぐらいからリンゴの木を植えだしたんですね。リンゴの木は霜で枯れる場合がとても多かったのです。それが、枯れては毎年植え、枯れては毎年植えというふうにしていたら、2015 年ぐらいから実をなりだしたんですよね。リンゴの木の体が耐性をちゃんと付けて育ってくれたのもあるんですが、リンゴがとてもできるようになりました。わが家にはリンゴの木が 15 本ほどあるのですが、いつも 800 個から 1,000 個ぐらい取るようになりました。今年は遅霜が 6 月 6 日にありました。春の天気がよかったので、4 月 20 日ぐらいまで雪があったのですが、そこから一気に気温が上がって、5 月中旬ぐらいに花が一斉に咲きだしてしまっただけですね。それで花が散った直後に霜に当たってしまったので、今年は収穫したリンゴは 100 個ほどしかなかったです。そういう年もあるだろうというふうに思っています。

それともう一つ、イチジクがなりだしました。イチジクは、私イチジクとても好きなのですが、イチジクで育ったような人間なので、今から 7 年ほど前に、私の 60 の還暦のお祝いに弟がイチジクの苗木を仙台から送ってくれたんです。それを植えて、冬の間は鉢に植えてボイラー室に置いたりしていたのですが、あまりにも大きくなって鉢が重くて処理できなくなったので、地植えにしっぱなしにしていたんです。夏の間は威勢よく葉を茂らせるのですが、冬になって春になると全部枯れているんですよね。でも葉っぱが出てきて、去年からそれに実をつけるようになったのです。去年は 9 個実がなりました。でも収穫はできませんでした。早霜に当たってしまいましたので。今年はもう数え切れないぐらいの実をつけました。でも、もう霜が当たったので食べられないのですが。でも、いつかこれは絶対、温暖化のおかげで(?) イチジクは食べられると思っています。

五十嵐農場立体農業略図

○ 昭和52年(1977)



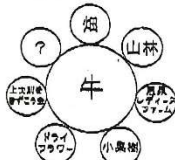
・原野 12ha 牛8頭

○ 昭和62年(1987)
10年後



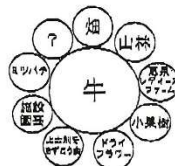
・総面積 37.6ha

○ 平成9年(1997)
20年後



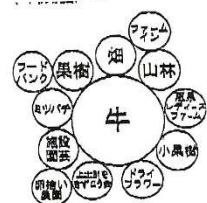
・総面積 76.3ha

○ 平成20年(2008)
30年後



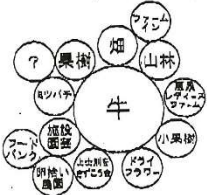
・総面積 96ha

○ 平成30年(2018)
40年後



・総面積 118ha

○ 未来予想図(2038)
これから20年後?



- 1977 結婚
長男 直人誕生
- 1978 住宅建設開始
- 1981 長女 恵誕生
キイチゴ栽培開始
- 1983 次男 信人誕生
畜産基地事業参加(草地造成他)
- 1984 藤崎盛一先生来訪
- 1985 愛媛県立農業大学校
恵泉女学園短期大学園芸生活学科
夏期実習生受け入れ
- 1987 かみしゅっぺつだよりスタート
- 1988 恵泉レディースファーム友の会スタート
牛舎増築
- 1992 宿泊施設建設開始
4件の離農地を買い求める
- 2002 稲作体験園きたごりんファーム開設
育成牛舎建設
- 2004 愛と平和のトマトジュース開始
直人 就職(新聞記者)
- 2005 長女 恵結婚
恵と信義、農場スタッフに加わる
- 2006 農地購入(16.7ha)
孫 蒼空誕生
リンゴ栽培開始
- 2007 信人農場スタッフに加わる
ミツバチ飼育開始
施設園芸(トマト)開始
果樹園植樹開始
- 2008 新規就農者研修生受け入れ
- 2009 孫 凛花誕生
- 2011 研修生移住用住居購入
- 2013 信人 就職(他産業)
- 2015 山林購入(豊島の丘)15ha
農地購入(5ha)
- 2017 婿・信義に経営移譲
フードバンクのための野菜作り開始
- 2019 福島会津農民福音学校報告
- 2020 山林・農地購入

2020年度経営概況

総面積約125ha

牛 30頭

鶏 19羽

カボチャ 5ha

ビート 4ha

ジャガイモ 0.3ha

小果樹 0.3ha

トマト 0.1ha

牧草地 55ha

山林 50ha

発題③「命：絶望と意味ーキリスト者医療従事者として COVID-19 に向き合う」

大友宣（医師、JOCS 常務理事、医療法人財団老蘇会静明館診療所理事）



司会（岡本） 初めて、大友さんにメールをお願いをしたところ、快く引き受けてくださいまして、今はコロナウイルスの状況の中で、どういうふうに私たちキリスト者として命と向き合っていけばいいのかというようなところをぜひ伺いしたいということです。どうぞよろしくお願いします。

大友 よろしく申し上げます。札幌で在宅医療の仕事をしています大友と申します。キリスト者として今のコロナの状況を受け止めるか、コロナ禍の中で経済を優先され、格差差別が広がっている、この状況に対して命と向き合っているかをキリスト者医療従事者から発題、報告、提言をお願いしたいというご依頼がきて、どんなお話ができるか分からないけれどもやってみます。

■絶望と意味

私自身、農村とか農業にほとんど関わりがないので、お話を聞いていてじっくりくるお話ができるか分からなかったんです。農業と伝道ということを皆さん、お話しされているのかなと思って、医療と伝道というのを私がお話するとしたら、農業と伝道、医療と伝道はどちらも伝道に関係ないのに勝手に結び付けちゃっているという、池迫先生のお話にもありましたけれども、結び付かないものを結び付けてやっているようなところがあるような気がして、そこにアナロジーがあるのかなという感じがしました。私自身は医者なんですけれども、医療と介護の連携をしたり、地域づくりとかをやっていたりして、何となく自分で越境する専門家というか、境を越えていく専門家というのとして仕事することに面白さを感じるところがあって、皆さんのお話を聞いていて、すごく面白かったです。

今日は、絶望と意味というお話をしていきたいと思います。私は聖公会の信徒で、牧師の息子なんですけれども、JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）というところの理事をしていたりとか、いろんな社会活動をしています。普段、仕事をしているのは、静明館診療所というところで、在宅医療もやっています。やっていることは訪問診療、地域づくり、海外医療協力会の仕事みたいなことで、普段は訪問診療しているけれども、いろんなことを頼まれたりします。今日、お話しする絶望と意味というのは、ヴィクトール・フランクルの公式というのが前にテレビでやっていて、そこからとっています。その公式というのが、絶望＝苦悩－意味。数学みたいに移項して、「意味」を左辺に持ってくるとプラスになる。絶望に意味を足すと苦悩になる。苦悩から意味を引くと絶望になるという式があって、そのお話をしたいと思います。アカシアハイツでの診療支援、絶望と意味、意味を支える対話、意味というお話をしたいと思っています。

■アカシアハイツ

アカシアハイツという所の診療支援のお話をします。札幌市で2020年3月に新型コロナウイルス感染症第1波の流行がありまして、4月中旬から第2波の流行がありました。本当に最初のころですね。患者が増加して医療機関が満杯になって、ゴールデンウィークには感染者が多くなっていったという時期がありました。札幌市が東京よりも人口当たりの感染数が多くなって、ゴールデンウィーク中に高齢者施設で新型コロナウイルスの患者さんが発生するということがありました。こういう状況の中で、茨戸(ばらと)アカシアハイツというところのクラスターが発生しました。これが第1波、第2波というところなんですけれども、本当に人数が少ないんですけれども、今よりも少ないぐらいなんですけれども、この当時はすごい大変な状況でした。4月にこの施設の入居者の人が発熱して入院したら、この人が新型コロナウイルス陽性ということが分かって、この施設の中には他に発熱の人が29人いて、PCR検査をすると14人の人が陽性というふうに分かって、クラスターですということになりました。

この時、4月25日に陽性と判明して27日にクラスターですとなった日に、感染症の専門の先生から個人的に、大変なことになってるんですけど何か手伝えませんか、という話がありました。困ったな、やったことないのにこんなことできないと思いました。でもみんな困ってそうなので、できることがあったらやりますとお返事しました。その後保健所から要請が正式にあって、アカシアハイツの協力をするということになりました。一人じゃなかなかできないので、医師会の先生方と一緒にやりますというお話しをして、コロナなんて見たことがないから、お年寄りの一般的な健康管理ができますという話をして、他の在宅をやっている先生方と一緒にすることになりました。

5月1日に正式の依頼があって、内容を調整して、5月2日からアカシアハイツの支援をすることになりました。5月2日から31日まで支援したんですけれども、16人の先生と一緒に、レッドゾーンといってコロナのウイルスがどこに付いていてもおかしくないゾーン

に入るということをしています。

■「混乱」

5月2日に診療支援を開始しました。もともと看護師さんがいまして、入居者の状態を把握していて、この人が具合悪いので見てくださいというのが5月2日でした。ここの施設でクラスターが起こって、施設の職員も感染したりとか、濃厚接触になったりとか、あと看護師が家族からこの施設には行っちゃだめというふうに言われまして、5月3日にはもともと勤務していた看護師が全て勤務できない状態になりました。5月3日の夜から応援に来た看護師が1人ずつ夜勤をして、初めて応援に入って、入居者を把握したり物品を把握したりして、いろんな処置をしなければならない状況になっていました。私が入ったのは5月3日からなんですけれども、本当に応援している人しかいないという状況になっていました。介護職員もいなくなって、40数名いたんですが8名だけで日勤も夜勤も、100名近い人のケアをするという状況で、相談員、事務職員、ケアマネ、事務局長たちも実際の介護をしていたりとかして、大変な状況で、食事が1日に1回しか提供できなくて、薬を昼にあげられなくてみたいな感じになっていました。

職員は自宅に帰ることができなくなって、車の中で寝泊まりしたり、シャワー浴びたりできない状況で、昼に働いてそのまま夜働いて、24時間以上勤務していた状況であったというふうに聞いています。これだけでも大変なんですけれども、防護服を着て、苦しいマスクをして、何時間も勤務しなければならないような過酷な状況でした。

1階はPCR陰性者、2階は陽性者と分けられていまして、入っていくと1階で防護服を着て、すごい格好をして入っていくんですが、1階に入っていくともう日常の老健の風景で、談笑しあってご飯を食べているという風景がありました。2階に上がったら違うのかなと思って入っていったら、同じように談笑して食事をとっているという日常の風景がありまして、それと同時に介護職員が圧倒的に不足していて大変な状況で、看護師も不足していて大変な状況。だいたいの方がそんなに具合悪くないんだけど、少数の入居者の方が重症化して大変な状況になっていたという、日常と災害が一緒にある状況でした。

■できることを考えて

そういうところで、圧倒的に人手が足りないという状況なので、人手が足りなくてもできるような診療指針というガイドラインをすぐ作り始めました。人数がすごく少なくても指示ができたとか、処置ができたとかいうことを考えてやりました。

本当にこの時に、どうしたらいいんだろうと思って、最初に入った時に、看護師さんもないという状況の中で、どうしたらいいのか、めまいがするし息苦しいし、30分ぐらい動けなくてじっとしていたんですけれども、このアカシアハイツに入る前に、「できないことをあげればきりが無い、できることを考えて行動するというのが災害の現場でやっていることです」とSNSで私にメッセージをくれた知り合いの看護師さんがいまして、どうした

らいいんだろうと息苦しく動けない中に、これ言っていたなと思って、できないことをあげればきりが無い、できることを考えて行動するんだったと思って、そこから動き始めて、指示を出したりとか、看護師さんと一緒に診察に行ったりとかして、診療指針を作り始めたりすることができました。他のお医者さんにも看護師さんにも、この言葉を伝えて、できないことばかりだけれどもちょっとずつやろうということをみんなに言い始めました。

診療支援開始前にも死亡例が2例あったんですけれども、5月6日ぐらいから死亡例が何例かあって、数時間から数日以内に病状が進行して亡くなる方が、この当時、出てきていました。短い間に亡くなってしまうということがあって、朝、具合悪くなったなと思ったら数時間で亡くなってしまうたり、前の日に咳が出ていたなと思ったら酸素が次の日に必要になって次の日に亡くなってしまうとか、本当に急な進行がありました。重症化しちゃったら救急搬送しても救命するのは難しいなというふうに感じていました。

■試行錯誤

ゴールデンウィーク明けぐらいには札幌市の病床にも余裕が出はじめまして、4日から災害派遣チームという、厚労省の医師と看護師が応援に来て、入院のために入居者の情報収集を開始しました。入院させるためにはもともとの情報が分かってなければいなくて、それを今の状況と合わせて病院に送って入院調整が始まるんですけれども、もともとの情報も、どんな状況かも、レッドゾーンというコロナウイルスがいっぱいある所にデータがありますので、そこに入って行ってデータを入手して、それを持ち出すわけにはいかないのでメールで送ったりとか、防護服を着てその前に座って外に情報を送って、保健所にそれを送って入院調整が始まる状況で、なかなかこれが大変で、1例目が入院できたのが5月11日という状況でした。こういう、地道に作業をしていました。

応援看護師が何人か来ていたんですけれども、応援に来ていた看護師が発熱してPCR検査の結果、陽性になりました。自分も応援に来ているんですけれども、応援に来た人が感染しちゃったというのは本当に大変なことで、その対策をきちんとするよという申し入れをして、その後、対策を万全にするように改めています。

5月16日に札幌市がようやく現地対策本部を設置しました。4週間を目標に介護ができる体制をつくって、コロナ感染のクラスターを収めるということをしよというこで、人と物とお金を投入するように市が動きました。5月17日、現地対策本部で会議があって、全体の方向性を話し合ったんですけれども、このミッションを達成するためにどういうふうにしようかと話をしまして、このアカシアハイツの中できちんと介護ができるようにしないと何も始まらない、生活できるようにしないと始まらないということで、急性期病院にコロナの陽性になった人をすぐに入院できるようにしようというこで、人をたくさん投入して、情報を収集して、3日のうちに20人以上の入院調整を行うということをししました。そこからは少数の介護職員でも、人数が少なくなった入居者を介護できるようになって、アカシアハイツの中の療養環境というのは改善し、回復期に入っていきます。

その後、だんだんコロナウイルスを収めていこうという対策が取られまして、医師会の支援も5月31日をもって支援を終了するというふうになりました。コロナ感染は収まって、この支援は終了したということです。入居者95名がいたんですけども71名が感染しました。そのうち17名が亡くなっています。そのうち12名が施設内で亡くなったということです。

■問いの観点を変える

大変な出来事が2020年5月にありました。この時に私が感じたのは、絶望というか、何をしたらいいのか分からなくて絶望的な気持ちになって動けなくなるし、何も考えられなくなるような状況だったような気がします。一人で入っていくのが怖かったし、何もできないというふうに感じました。この当時あったのは、誰も助けてくれないという状況で、介護職員もいないし看護職員もいないし、いろんなところに助けを求めたんですけども、ネットを通じてとか、電話したりとかして、いろんなところに入って助けてくれないかと言ったけれどもどこも助けてくれなかったりしました。打っても響かない。役所にやってくれと言っても、なかなかできなくて、縦割りで、打っても響かないし、だんだん状況は悪くなるし。しまいには、自分のせいじゃないかと思うようになってきました。

この時に、意味というのを考えたんです。絶望の時にここに入っている意味があったのかということ考えたわけです。ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』の中に「必要なのは生命の意味についての問いの観点の変更なのである」という言葉がありました。アウシュビッツの中でヴィクトール・フランクルは、命の意味についての問いの観点変更ということがアウシュビッツに生き延びるために必要だったと考えたんです。人生についての観点変更というのは、われわれが人生に対して何を期待できるかという問題じゃなくて、人生が何をわれわれから期待しているかという問いに変えなさい、そうすると意味を見出すことができるのだというのがヴィクトール・フランクルの視点だったわけです。

これは病気の時も同じことがいえる。自分が病気になったりした人も、こういうふうな観点を持つことがあるなど感じることもありますし。災害の時とか、災害に遭った人、東日本大震災もそうかもしれませんし、いろんな災害の時にこういうことを感じる人がいるかもしれない。こういう事態、アカシアハイツの事態、状況、そういうところで、こういう時に何を私たちが期待できるかじゃなくて、この状況がわれわれから何を期待しているか、そういう問いに変えてみるということかもしれないなということだったと思います。

私自身、この絶望にどんな意味を与えたのかということで、幾つか診療の中でやったことがあります。現場の絶望というのがあったわけですけども、真っ先に最初に現場に入ったということで、職員とか入居者に声を掛けることができたんですけども、それ自体は、よく分かんないけど医者が入って助けてくれてるんだみたいな、何もしてくれないけど助けてくれているかもみたいな、よく分かんないけど入ってきてくれたなみたいなところがあ

ったかと思います。あと、先が見えないんだけど、介護職員の防護服が足りなくなっていることがあって、くれるという医療機関があったので、そこからもらってきたりとか。あと、5月13日が母の日だったんだけど、カーネーションを買って介護職員に持っていったりすることができました。誰かがやらないとこの状況を打開できないかなと思ったんですけども、この時に、ほとんど何もできないんだけども医師の集団を組織化して情報共有してここに入ることができたということです。

少ない人数で何とかしなければならなかったんですけども、診療指針の策定をして、そういう状況を少しでも何とかしようとした。現場の災害みたいな状況というのを、いろんな媒体を通して周知したりとか、誰も方向性が見えないんですけども、現地対策本部で方向を一致させるようにしたとかということが、入った意味があったのかなというふうに思います。

■対話の大切さ

私は『ヨブ記』という書物がずっとよく分からなかったんです。最後まですごい苦しいのが、突然最後にハッピーエンドに終わって、最後だけちゃちいなみたいにずっと思っていたんです。しかし、ヨブが変換するところがあると最近分かったんです。「聞け、私が語る、私が尋ねる、あなたは答えよ」と神がヨブに語りかけるとい、ずっと神にヨブが問うていたのに、神から問われるということをヨブが体験するという場面がこの変換点だと思うんです。この時に、初めてヨブに意味が与えられたという感じが最近しています。そこはすごく、私が経験してよく分かったことでした。

意味を与える対話ということで、絶望の中で意味を与えるというものは、いろんなものがあるかと思います。やっている中で、遠く離れていて入れないけれども応援しますというメッセージをいろんなところからもらったり、看護師さんから「できないことをあげればきりがない、できることを考えて行動する」という言葉をもらったり。私自身が、困っているのは私じゃなくて、困っているのはアカシアハイツで働く人と住んでいる人だなということに気付かされたこととか。誰のせいでもなくて、新型コロナウイルス感染症とか、その感染症に伴う差別と偏見と戦っているんだなということに気付かされた。そういうところに意味を支えたものがあったのかなというふうに思います。

意味というのは、いつも対話から与えられるんじゃないかなと思うんです。それは自分自身との対話であったり、人との対話であったり、神との対話であったりすることがあるのかなと私自身は思っています。

ウィズコロナ時代の対話ということで、対面して対話するということが非常に難しくなっているという状況の中で、話しことば的、書きことば的、オフライン、オンラインなど、いろんな対話の方法が最近出てきています。対面というのは話しことばで、オフラインでできて、一番いいのかなと思います。こういうものに加えていろんな代替手段ができているというふうな感じはしますけれども、本当に対面の大事さというのを今、思わされているところ

だと思います。対面には感染リスクがあるんですけども、やっぱり人と対面する、仕事する、私自身は臨床家なんですけれども、人と対面する意味というのがどういうところにあるのかということ、ずっと考え続ける2年だったなと思っています。治療としての対話、コミュニケーションは多くの技法がでてきていて、SNSとか人工知能とかの会話が始まっています。傾聴的対話ができるAIができるのかもしれませんが、人が人と対話して、人に意味を与える、そういう対話というのはどういうものなんだろうというのが、私は最近気になっています。

■「鶴太郎」のこと

最後になりますけれども、この（画面に写っている亀）「鶴太郎」はアカシアハイツの中にいたカメなんですけれども。アカシアハイツは閉じ込められたわけなんです、入居者が感染の中で閉じ込められて、そこにいろんな人が助けたり助けられたりしたわけなんですけれども、入り口にカメがいて、そこに閉じ込められているカメがじっと私たちを見ているみたいなところがすごい面白くて、そのカメを写しました。この下のところにある日程表は、このカメに、クラスターになってからカメに誰も餌をあげる人がいなくて、このカメに餌をあげる人がいないから、カレンダーにチェックしてカメにえさをあげましょうという表を作ったという。人もちょっとやったけど、このカメを助けることができたのが私だったというお話です。以上です。

【質疑応答】

質問（鳥井）：ありがとございました。鳥井新平と申します。滋賀県の近江八幡から Zoom しております。私は36年間、近江兄弟社というところで小学校の教員をしております、その時に、1人教員が砂場で自殺したんですね。その時は学校中がパニックになりまして、今の太友さんのお話を聞きながら、その当時のことを思い返しておりました。一つお尋ねしたいのは、最初に出された数式ですね。絶望＝苦悩－意味、それを変換して絶望＋意味＝苦悩であると。このことも併せて考えた時に、今のお話と私の体験したことを考えた時に、もう一つ、弟が去年2月に末期がんで、コロナ禍で亡くなったんですけども、その時の彼の最期も併せて思い出したんですけども、意味というのは、そこに意味があるのではなくて、数式にすると意味×みたいな、何か人間がそこで意味を生み出すとか考え出すとかいうよりも、どこからともなく意味が立ち上がってくるといいますか、X的な要素というか。だからキリスト教信仰者の的にいえば、そこに神の力が働いたり、ヨブの転換が行われたような、何かびっくりするような、当事者がそういうふうにしようと思ってなっていないのに立ち上がってくる瞬間というか、Xみたいな。意味が立ち上がってくる瞬間といえますか、今の太友さんのお話の中では、いろんな方の言葉であったりとか、カメの存在であったりとかするんですけども、それはその瞬間にその場で、その状況の中で意味としてぐっと浮上してくる時の現象があるかなとお伺いしたいなと思いました。例えば、私の、自殺された時には釜ヶ

崎に金井愛明さんという牧師がおられて、その方が私に、鳥井さんが主の祈りというのは行ずるんだと。念仏みたいに唱えるんだということを教えてくださっていて、誰もが寄り付かなくなった事故現場とか学校に足を踏み入れたり、朝早く行って最後に帰る時に、主の祈りを行じたんですね。その時に、意味が自分の中で変わってきたというか、そういう経験がありました。大友さんの場合、お話しくくださったことの意味のところをもうちょっと深めてお話を伺いたいと思います。

大友：ありがとうございます。私自身は、普段、在宅医療をしまして、在宅で末期の方とか、そういう方の診療をしています。意味というところは、そういう方たちから教えられる体験をいつもしていて、そこで自分自身が、このアカシアハイツで経験したという感じがします。本当に、患者さん自身も家族も、絶望の中にあるのに、突然意味が与えられていたりとか意味を見いだしたりするという体験をすることがよくあります。それを自然に支えられるというか、それをお手伝いできるようにするというのが、私自身の、例えば痛みをなるべく取り除いて自然な状態にすることで、その人が持っている力を発揮して意味を見いだすこともありますし、そういうところから私自身は学んでいるような感じがします。だから、本当に今おっしゃるような感じで、立ち現れてくる瞬間というのがあって、泉のように湧き上がる意味というのは、よく私自身も経験するというか、見ます。

岡本：いただいた資料の最後の方、対面というところで、対面には感染リスクがある、Before コロナまで対面のないコミュニケーションは難しかったというところがスライドにありまして、人は人と出会うべきなのか、臨床家はなぜ対面の必要があるのかを考える時代と書いてありまして、対面について考え直さないといけないというような問題提起かなと思うんですけれども、対面するということについて、大友さんはどういうふうにお考えかなと。礼拝とかそういうことについて、どういうお考えをお持ちかお伺いできればと。

大友：私は日本キリスト者医科連盟の教会の新型コロナウイルス感染概論というのを作ったんですけれども、いろんな教会で使っていただいているみたいなんですけれども、要するに、しっかり感染対策して、しっかり礼拝しようねというガイドなんです。どうしてそういうふうにしたかという、やっぱり礼拝というものはオンラインでもいいかもしれないんですけれども、その場にある現実感というか、触れ合いだったりとか、神がそこにいるのというのは、その場でしか体験できないんじゃないかという気がして。農業とかも同じじゃないですかね。現実感がないところで、なかなか私は難しくて。しっかり感染対策して礼拝しようねという形にしているんです。人と人との対面するとか、礼拝堂にいるとかというのは、すごく意味付けを考えなくちゃいけない 2 年だったというふうに考えて。意味付けを考えると、与えられた恵みなのかもしれないですね。礼拝はなんで大事なんだろうというところが、ガイドを作って考えさせられました。

飛田：最後のカメラさんですけれども、鶴太郎と書いてましたね。

大友：そうです。これは面白い名前を付けてカメの鶴太郎という名前が付いていましたね。
老健の職員が付けていましたけれども。すごい面白い名前でした。



交流のとき

司会（飛田）：大友さん、ありがとうございました。そろそろ最後のセッションになります。ZOOM 参加の後藤さん、西間木さん、斎藤さん、という感じでスピーチをお願いします。

後藤聡 後藤です。今日は4つぐらいかたまっていて、この後も別のZoomの会議というか講演があって、なんだか大変だなと思います。池迫さん久しぶりです。五十嵐さんは初めて会ったんだけど、俺も仙台なんだ。東北学院を出て関西に行って、ずっと関西にいます。斎藤さん久しぶりです。鳥井新平先生もごくろうさまです。秋山君もちっとも会わないね。佐々木さん元気？ ちょっとやつれてきたよ。大友ドクター、ごくろうさまでした。最後のやりとりは面白くて、こちら、こんなZoomなんかやってるのに礼拝は結局一回も休まないで続けました。大阪で。それはやっぱり礼拝という営みを崩すのがためらわれた。来れないとか実際には難しい人はオンライン、その場でお祈りくださいと。ただし教会は文字通り感染対策をしっかりやって礼拝は続けようと。逆にこの間、集まってやる礼拝は何なのかとか、聖餐式は何のためにやるんだろうかというのが問われたという意味では、面白い経験だったかなというふうに思います。

もちろん答えは出ていないんですけども、いろんなことを本当は議論できたらよかった。聖餐論も教団は割と聖餐論でごちゃごちゃしていますけれども、本当はその聖餐の意味とか意義、共同で食事をするという意味、その食事が当然、農をスタートとしてやっているんだということについては、よく分かりますというか、むしろ教会がいついかなきゃいけないんじゃないかなというふうに思われています。斎藤さんは東北で稲刈りをやったり、今日はことをやって、またゆっくりとどこかでという感じが……。

西間木：皆さんこんにちは。北海道の日本基督教団新得教会の西間木です。北海道に来て4年目になりました。先ほど、共生庵の話を聞きながら、前は島根県にいたものですから、本当に懐かしいなという思いでおります。北海道は先ほど五十嵐さんのほうから話がありましたとおり、信じられないような暑さの夏がありまして、今年はジャガイモが小ぶりです。そんなこともあって、他の野菜もそうなんですけれども、野菜の高騰で、都市部の方々は大変だろうなということを思っております。この北海道におりますと、野菜が手軽に手に入るんですけども、それでも購入しなければいけない人にとって、この経済下であって、野菜を手に入れることが本当に大変だろうなと思います。

また、私は十勝なんですけれども、生産はすごい量を作るんですよね。ですけども、このコロナ禍で飲食業がなかなか難しい中にあると、その販路というものもできなくて困

っています。私がいる所では、いろいろ悩みを抱えたり、障害を抱えている方が農業をしたりチーズを作ったりしているんですけれども、チーズの販路もコロナ禍でなかなかなくて、本当に苦戦しております。北海道は、先ほど池迫さんがチーズを見せてくれましたけれども、大きいです。私も 4 年目なんですけれども、いろんな所に行きたいなと思いつながらなかなか行けないところがあります。ようやく北海道の地理も 4 年たって分かってきたし、いろんな所へ行けるようになってきましたので、コロナが明けたらいろんな所に行きたいなと思っております。あと、私は島根県にいるころもそうなんですけれども、北海道に来てからも行政のほうから保健福祉の行政的なことを決めることの責任を担ってくれということをやっているものですから、今、石油が高騰しているということが問題になっていて、この間も会議に出て、貧困家庭に対しての福祉灯油というんですかね、北海道は本当に寒いと灯油がないと大変ですので、貧困家庭に対して灯油を配るということを協議してほしいということを市に申し入れました。

また、子ども食堂というものの、こんなに食べ物がある所でと言われるかもしれないんですけれども、逆にいうと、都市部の方々は子ども食堂に並びやすくて、北海道のような所にいると、やっぱり北海道で食べ物なんか困らないんじゃないと思われるんですけれども、案外、シングルマザーの方だったり、貧困の方が、食べることに事欠いていて、でも誰にも相談できないという現状があります。その中で、それでも子ども食堂をして、なんとか命をつないでいくということをしております。ですから、都市部においても子ども食堂、またおとな食堂でもいいんですかね、これから食、命をつないでいくということが大変重要なことになってくると思います。今日、総幹事から話がありましてとおりの、本当に私たちは大変な状況かもしれないんですけれども、その中でも分かち合っていくということを、今日またこの会で覚えさせられました。ありがとうございました。

斎藤 皆さんこんにちは。今日は荒川先生のお話をじっくり聞くことができ本当に良かったです。先生には一度、会津においでいただきたいというふうに思っていましたので、この Zoom を楽しみにして待ちました。本当にありがとうございました。それから、池迫さん、紀子さん、大友先生、それぞれの発題、本当にありがとうございました。

私は日本基督教団の東北教区にある会津農村伝道センターの運営委員長をしています。していますというのは、もう誰も担ってくれないので、6 人いるんですが、牧師が 3 人、信徒が 3 人という、そこで運営委員長をしているのが私ということで、教団的には考えられない信徒が委員長をやっているようなことでありますけれども。本当にそういう中で、私たちは 2 月に会津農民福音学校ということで、これは遠藤栄牧師がずっと続けてきた運動なんですけれども、第 87 回になる農民福音学校を開いています。コロナ禍の中でしたけれども、昨年は会津地域の中で農民信徒の方もおられます。若い後継者の方もおられますので、その人たちから発題をいただいて開催することができました。

今年、どんなふうにしようか迷いながらいるところなんですけれども、開催はしていきたいと

思っています。私も今、衆議院の選挙の中では、弱小政党の中で踏ん張りたいと思っているんですが、本当にそういう中で、西間木先生からもありましたように、地方でも困窮者の方々が増えています。家賃の補助制度を借りる人、食糧支援を受ける人というのが増えています。そういうのが明らかにならないのが地方であるかもしれないです。ある意味では。本当にそういう中で、私たちも大事なこととしては、やっぱり神様の食卓を分かち合うということのを大事にしていきたいと考えています。ありがとうございました。

鳥井：ありがとうございます。鳥井新平です。私は同志社大学の神学部で牧師になるための勉強をしております。この間、試験の出願をするために志願書を書いたんですけども、推薦状を書いてもらうために近江平安教会の谷本一廣牧師にお願いしたところ、一回志願書を持ってこいと。書いて持っていったら、書き過ぎだから削れ、削れ、と。毒のない志願書にいただきました。それから、日本基督教団部落解放センターの活動委員をしております、40周年なんですよ。この前、別件で小柳伸顕牧師にお会いした時に、小柳さんが僕に、40年たって部落解放センターは教団に何を与えたんだと、どんな影響を残したんだと。カナダやドイツから献金をもらうのはいいけど、その精神ももらわなあかんという厳しい指導を受けてまいりました。以上です。

秋山史 日本福音ルーテル豊中教会の牧師をしています。実は私、札幌出身で、母が八雲の牧場の娘です。通っていた高校は野幌高校で、三愛女子校の隣にありました。ばんばん響いてくるのが、私が最初に赴任した所が静岡の袋井市にあるデンマーク牧場という、登校拒否の子どもとか、家庭内暴力の経験を持った子どもたちの共同生活寮があった教会なんです。そこで私、搾乳もしました。ですから、一応搾乳の手伝いはできるかなと思っていますけれども。そんな経験があって、今、釜ヶ崎の希望の家という所でも代表をしているんですけども、農村の問題というのは、デンマーク牧場で過ごしている時に、ある意味、農村の閉じられた感覚というのか、そこで3代過ぎさないと、その地域の人に慣れていけないというのがすごく感じて、居心地が半分悪かった部分も実は感じて経験しています。

しかし同時に、農村の問題というのと、都市の問題というのがものすごくリンクして、混ざり合っている。釜ヶ崎で経験するのは、農村から出てきた人たちが日雇いの労働をして帰れなくなったり、家との関係がなくなったりということもいろいろ見聞きしたということもあるので、例えば共生庵の取り組みにしても、あるいは農伝の取り組みにしても、リトリートする場所としての施設とか教会というものを、きちんと考えていかなきゃいけないのかなということも思いました。ルーテル教会は一応、そういう施設とかはあるんですけども、うまく使えているかな、あるいは施設をする側と利用する側というふうに分かれてないかな、共生庵はそれを一緒にやっているという一つのモデルなのかなということを考えさせられながら話を聞かせてもらいました。ありがとうございました。

佐々木拓次郎 皆さんこんにちは、初めまして。ササキタクシロウと申します。特に他の先生方と違ってこういうことをやっていますというところがないんですけれども、今、大阪の生野区にあるカトリック系の団体の、知的障害の、聖フランシスコ会というんですけれども、釜ヶ崎のほうではふるさとの家、そこも運営に入っていて、一番メインの運営のところは、生野区にある生野みんなの家という知的障害、昔そこにカトリック生野教会という、今もちろんあるんですけれども、その主任司祭をやっていたチネカ神父という方が、ドイツ出身の司祭ですけれども、地域の中で障害を持っている人たちがどう生きるのかというふうなことを問うために始めたというところで、特にそこで仕事をしているのは KCC の名誉館長をされている李清一先生の紹介があって、そこでさせていただいているというふうな感じです。

ちなみに、今回こちらでお話を聞かないと、と思いながら、実は昨日の夜、申し込みは既に過ぎていたところで、申し込みが必要だったんだということで急きょ、飛田さんに切々と参加させてくれというメールを 11 時ぐらいに出して、参加させていただいたというところなんです。ぜひ聞いてみたかったというのが、大友宣さんです。久しぶりです。私、実は 25 年前、日本キリスト教海外医療協力会 JOCS の東京のほうで職員をしていました。その時に大友宣さん、その時は確か信州大学の医学部の学生さんで、他の大学を出て信大の医学部に入ってお医者さんを目指しているという。その時に一緒に国際医療協力について考えるというプログラムがあって、そこでも非常に主導的に、主体的になっていろいろとプログラムを考えてくださった。そのころから非常に他の医学生にはない、なかなかしっかりした感じで、今回、お話を聞いて、非常にしっかりとした考えのもとでお医者さんをやられているなというふうに感じました。

特に、コロナ禍の中での教会の在り方というところですね。私は結構 Facebook で他の教会のオンラインのやつをシェアしながら、これも一つの宣教のお手伝いかな、みたいな感じで勝手に解釈してやっているんですけれども、やはり礼拝に出て、その後の教会に来られた人との交わりというか、それが非常にポイントといいますか、あるんじゃないかなと。だからオンラインで礼拝説教、メッセージが終わったらそれで終わりといって、急に現実世界に戻されるというふうな、なかなかそのあたりが非常に、自分の中ではある意味、違和感を感じている中で、あえて休まずに礼拝をしていくというところが、教会の一つの大きな意味合いがあるのかなと感じております。なので、今日は大友宣さんの話を聞けて非常にうれしかったなということと、今後も URM の活動というのは、非常に私は楽しみにしていますので、引き続き参加していきたいなと思っています。ありがとうございます。

岡田仁 初めまして。日本基督教団の牧師で、今、東京の富坂キリスト教センターというところで主事をしております。もともと大阪出身で、関西学院で神学を学んで、九州の水俣と佐世保で 12 年ほどおりまして、基本的に西日本の人間で、なかなか東京になじめずに四苦八苦して十数年になります。今日の金性済先生、総幹事のメッセージにもありましたように、

本当に分断とか閉塞感とか対立が続く中で、今どういうコミュニティー、どういうコミュニケーションが求められているのかなということを考えていたところ、先週の NCC の常議員会で今日のこの全国協議会があるということを知りまして、ぜひ参加させてほしいということで加わらせていただきました。本当に感謝いたします。大先輩の荒川先生のお話も初めて伺うことができて、現地報告の先生方のお話も非常に内容豊かな学びを与えられて感謝しています。富坂も牧師研修を 30 年前からやっていますので、共生庵、荒川先生からまたいろいろ学ばせてもらいたいなと思っていますし、今日の出会いとか交わりとかつながりを、これからも大切にしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。今日は本当にありがとうございました。

李相勁 こんにちは。在日大韓基督教会川崎教会のイサンギョンと申します。今日、発題を通して多くのことを学ばせていただき、ありがとうございました。私は数年間、大阪から在日大韓基督教会三次（みよし）教会に通ったことがあります。三次教会は先週、教会創立 70 周年を迎えました。共生庵で修養会をさせていただいたこともありまして、荒川先生にはお世話になりました。また三次に伺いたいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

鈴木 こんにちは。日本基督教団廿日市教会の信徒です。農村伝道神学校を卒業された先生が牧師であった周防教会で初期の教会生活をしまして、農村でのキリスト教のことを、ずっとその当時は考えておりました。もう 60 年近く前になります。今日のいろいろな先生方のお話は、本当にそれぞれの信仰と生活をかけて取り組んでこられたことをお聞きすることができて、豊かな学びとなりました。

私自身はいろいろな市民運動に関わってきていますけれども、特に最近では広島 YWCA の関係で、子ども食堂にも関わるようになりましたので、これから子ども食堂のことについて、広島で私たちが関わっている子ども食堂は必要がある家庭の方で、学校の先生が勧めてくださっても、来にくいというふうな声を聞いたりして、なかなかサービスを受けてくださる方が増えないみたいなんです。そのあたりのことも、どういう取り組みができるか、これからしっかり考えていきたいなと思っております。皆さまからいただいたいろいろな刺激を、これからの教会生活、そして社会生活の参考にさせていただけたらと思っております。また、久しぶりにお会いできた先生方がありまして、とてもうれしかったです。ありがとうございました。

李民洙 もともと日本聖公会に属している司祭なんですけれども、2016 年の早期退職届を出して、今は広島のように完全に引っ越ししてきて、農村地域で何ができるかということを考えています。教会の在り方と宣教について、10 年ぐらい考え続けてきているんですけれども、新しい運動としては、カフェ・エクレシアというものを立ち上げて、カフェを運営し

たり、こちらに来てからは農村地域との関係の中で、里山 oikos というような集まりを月 1 回のペースで話し合うというような時間を持っています。こちらに来て、荒川先生の助け、協力によって、そういうものができるということに感謝していますし、李清一先生にまだあいさつもできていないんですけれども、李清一先生とか原田先生、岡田先生、李相勳先生等々、こちらに来てやっとお会いすることができるようになったと感謝し、うれしく思っています。ありがとうございました。

大谷隆夫 大阪の釜ヶ崎から来ました。共生庵には、前から一度、機会があれば行きたいと思っていて、なかなか来れなかったんですけれども、今回来てよかったです。一晩泊まるんですが、おいしいピザとか、ここで取れたお米をごちそうになりました。本当においしかったですよ。昨日は久しぶりに熟睡できて、だから来られていない方はぜひ一度、来ていただきたいと思います。以上です。

安藤眞一 皆さん、大変お疲れさまでした。日本自由メソヂスト教団の布施源氏ヶ丘教会で牧師をしております安藤です。本当にそれぞれ発言していただいた諸先生の皆さん方が、命を守る現場、農業の現場、医療の現場、それぞれで真剣になって命がけで頑張っておられるということで感銘を受けました。そして皆さん方のいろんなご意見もいただいて、大いに参考にして頑張らなければならないということを思っております。星野正興先生が、ずっと前から三里塚の農業の問題について触れられている機会もありまして、私自身はライフワークとして三里塚の農家の皆さんが、どうやって命を守るかという戦いの中で頑張っておられるということを思いながら、やっぱりどんな意味付けをしていくんだらうかということを感じながら、よい学びの機会が得られたと思っております。皆さん、ありがとうございました。

鹿野 こんにちは。日本キリスト教団の都島教会の信徒です。URM 委員会には日本 YWCA から派遣されて関わっております。もう長い間関わっているんですけれども学ぶことが多くて、いつも勉強ばかりしております。今回、コロナのおかげといいましょうか、こうやって対面と全国の皆さんとハイブリッドでできたということは、とてもよかったなというふうに思っております。みんなが一堂に会するというのはなかなか難しくて。ですけど、今回こんなに上手に Zoom と対面というのが一緒に会合できたということはとてもよかったなというふうに思っております。私たち委員会もますます技術を高めてこれを続けていきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

今給黎真弓 こんにちは。日本バプテスト連盟豊中教会の今給黎と申します。URM 委員会の委員です。たくさんの方々がいろんなことをおっしゃっていて、本当にそうだなと思いながら聞いていました。私は教会が、お話の中にあつたように、リトリートの場になればいい

なというふうに思っているんですけども、教会にずっといる私が実はリトリートしなければいけない立場だったということを今回感じていまして。申し訳ないんですが、初めて共生庵のことを伺って、ここに来させていただいて本当にほっとしているところで、これから夜の部もあって楽しませていただこうと思っています。ありがとうございます。

李根秀 大阪 KCC 会館の館長をしていますイグンスと申します。お久しぶりの方も、初めてお目にかかる方も一緒にいて、今は優雅な楽しい一時を感じて過ごしております。皆さま、ぜひ大阪にお立ち寄りの場合は KCC を忘れずにお立ち寄りいただいて、また楽しい一時を共に語り合いながら過ごしたいと思います。ありがとうございます。

李清一：皆さん、こんにちは。KCC の名誉館長、そしてまた NCC-URM では顧問という立場で関わっております。昨日、大阪を午後 4 時半に出発して、共生庵に着いたのは午後 10 時半でした。6 時間かかって、中型バスでやってきて、大変だったんですけども、長年、念願しておりましたこの共生庵に来られて感無量でございます。夜は寒かったです。真冬を感じております。今晚どうしたらいいかなと心配しながら過ごしておりますが、今日、現場からの報告を聞きまして、本当に各地で頑張っておられる姿に接して、非常に力を得ました。頑張ってください。ありがとうございます。

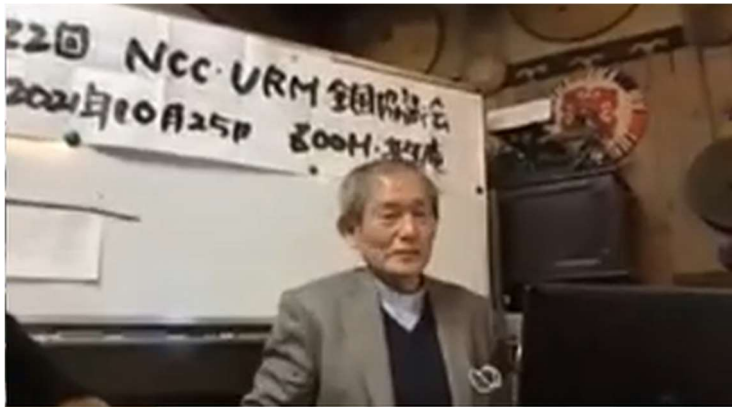
岡本拓也 日本基督教団から NCC に派遣をしていただいております協力委員の岡本です。南住吉教会で牧師をしています。今回、オンラインでこうやって北海道まで皆さんとつながることができて本当によかったなと思っています。いつも URM の協議会は大阪などでやっていたんですけども、なかなか来るのが大変だということでお会いできない方もいたなと思うんですけども、こうしてできて本当によかったなと。

まず、全部つながってよかったなというのがありました。オンラインというのは本当に便利だなと思うんですけども、共生庵に 6 時間かけて来て分かったことは、やっぱり現場に来るというのはいいなということで、会議が終わった後のご飯がおいしいとか、それこそ朝寒いとか、静かだとか、この体で感じるというのが本当に大事なんだなということで、どれだけ大変だ、素晴らしいというお話を聞いても、やっぱり現場に行ってみるのとは全然違うなと思うので、また今日、お話しいただいた方の所にも URM としてお伺いできたらうれしいなと考えています。コロナがどうなるか、今は不気味なぐらい静かですけども、どうなるか分からない中で、それでもやっぱり関わり続けるというか、出会い続けるということが続けていけたらなと思います。これからもよろしくお願いします。ありがとうございました。

●●閉会礼拝 メッセージ 原田光雄

“地はお造りになったものに満ちている”

〔聖書：詩編 104：24〕



主よ、御業(みわざ)はいかにおびただしいことか。
あなたはすべてを知恵によって成し遂げられた。
地はお造りになったものに満ちている。

世の中がいわゆる平生の状態であったなら、この第 22 回NCC-URM全国協議会は昨年 2020 年に開催されるはずでした。キリスト教界内外のほとんど全域における営みと同様、新型コロナによるパンデミックの影響を受け、感染防止のため、その開催の 1 年延期を余

儀なくされてようやく本日、開かれました。しかも、通常は2泊3日のところ、今回は、文字どおり本日一日のみ、と言うより正確には午後の時間帯、半日の開催、ということになりました。そして、その方法はと言うと、URM委員会メンバーと地元の方たちの他はオンライン参加という、時代の流れもあり、URM全国協議会が始まって以来初めてのスタイルで行なわれました。オンラインによる送受信もトラブルなく、今回、予定どおり開催することができていること自体、これまでの協議会とは違った味わいを噛みしめながら、感謝し、ホッとしています。

今回協議会は、近年の、全国協議会に関してはもちろん、一昨年(2019年)の第12回に至る日韓URM協議会などの流れを踏まえたもので、「食・農・命」をテーマに掲げました。場所に関しては、長年、URMのメンバーでもある荒川純太郎さん・奈津江さんご夫妻が共同主宰されてすでに20余年になる、ここ共生庵(広島県三次市)を発信拠点として開催しています。

内容は絞りに絞り、金性済さんからメッセージを受けた開会礼拝に続いて、荒川純太郎さんによる主題講演「食：マレーシアサラワクから共生庵へ―農村での学びと交流―」がなされ、発題・現地報告としてそれぞれ3つの現場から、池迫直人さん「農：キリスト教(神学)以前―農村伝道神学校から―」、五十嵐紀子さん「北海道での農場経営から―三愛塾・道北センターとのつながり―」、大友宣さん「命：絶望と意味―キリスト者医療従事者としてCOVID-19に向き合う―」。質疑応答や議論の時間を設けることもできず、申し訳ないほどにごく短い時間という制約はあっても、お一人おひとりが日々その場に身を置いて生き、働き、感じ、考える営みが、溢れるように語られ、対面で、或いはオンラインで、確実に伝わってきました。共生庵は丘陵地にあり、背後には山林がひかえ、目の前に田畑が広がっていて小川が流れています。加えて、今、私たちがいるのは、近代的な“会議室”ではなく、3棟ある昔の大きな農家の、作業場らしきいわゆる土間であるためか、それぞれのお話が、なおさらからだ全体で文字どおり体感されたのかも知れません。

さて、冒頭に拝読した短い言葉は、詩編第104編の24節です。神が創造されたすべてのものを、神ご自身がご覧になったように私たちも見つめ、それを見て神ご自身が思われたように私たち人間も、それがすべて素晴らしいと感動し、そして、神を賛美する。第104編全体がそんな情景をほうふつとさせます。創世記1章31節「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」とは、キリスト教信仰が明らかにする世界観の基本中の基本なのだ、と言えるでしょう。神は、ご自分のまったく自由な思いのままにこの世界を創造し、そして、その歴史を導いておられる。人間は、生きるために完璧に整えられたエデンの園で、その中央に植えられた「善悪の知識の木」の実の他は何を食べてもいいと、自由な振る舞いを許されました。しかし、エデンの園の神話の中で明らかにされているように、最初の人間アダムとエバは、神が人間に対して命じられたこの唯一の禁止事項を破り、神に背いてしまいました。その動機は、神のように「賢くなる」ことでした。このような動機を人間が抱くように唆したのは蛇だとされています。蛇は言いました、「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」。万物の創造者である唯一の

神を神とせず、自らを神とする、或いは神以外のものを神とする、ここに罪の原点があります。エデンの園の神話の中でアダムとエバの所業によって明らかにされたこの罪が、言うまでもなく「原罪」です。

この事件の後、アダムとエバは、「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」。こうして、人間は神に対して秘密を持つようになり、その日の夕方、神が園の中を歩く音が聞こえてくると、アダムとエバは「主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れる」ようになりました。人間が、「どこにいるのか」と神から問われる存在となった、というのも、たいへん印象深い記述です。こうして、神のようになろうとの動機から神の命令に背いた人間の所業は、すべて神の前に明らかにされました。

この原罪のゆえ、アダムとエバ、すなわち人間は、完璧に整えられたはじめの居場所エデンの園にいることを許されず、「エデンの東」つまりこの世界に追放されました。しかし、エデンの園から人間を追放しつつも、神は、人間が裸でいることができなくなったことを思いやり、アダムとエバに「皮の衣を作って着せられた」。言い換えれば、人間が、原罪を犯す前と同じようにしては生きられないということを受け入れ、原罪を犯した事実を背負ったままの存在として生きられるよう神は手を差し伸べた、と言うのです。

私たち人間は、エデンの園での原罪以来、罪を犯すことによって、まず神自身との関係を壊し、人間相互の関係を歪め、そして、自然環境との関係を損ねてきました。こういったいきさつが、続く創世記4章の「カインとアベル」、6章のノアの「洪水」、そして11章の「バベルの塔」まで、神話という文学様式を用いて興味深く述べられています。こうして、人間は、本来の居場所ではない「エデンの東」をさ迷い、居場所を、言い換えれば、自ら壊したこれらの関係を、何らかの方法で回復されるべきものとなりました。

さて、「食・農・命」とのテーマを掲げて、私たちは、開会礼拝の説教、主題講演、3つの発題・現地報告に耳を傾けました。どこの現場にも傷ついた人がおり、傷ついた世界の現実のあることがあらためて明らかにされました。と同時に、それぞれの現場では、その傷が癒され、傷ついた人や現実が回復されるようにと、実にさまざまな思考や実践の営みがなされているのを感じました。例えば、今日の新型コロナによるパンデミックは、それ自体がとてつもなく大きな課題ではありますが、むしろ、それが浮かび上がらせた、私たちの世界のさまざまな領域ですでに長く続いている歴史的・構造的な歪みとその重大性を適確に、深く見抜かなければなりません。

世界中それぞれの現場で、そしてついにこの世界全体で、その「回復」が成し遂げられる日をめざし、これからも歩みを続けましょう。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記1:31)という創造の祝福をいっぱい受けながら。

閉会の祈り（今給黎真弓）

今日もいのちが与えられ、それぞれの場を与えてくださっていることを感謝いたします。そこにすでにあなたが先立ち歩んでくださっていることを感謝いたします。

第22回 NCC-URM 全国協議会の中で、いのちに向き合う時が与えられたことを感謝いたします。

あなたはすべての被造物を慈しみ、よしとしてくださっていることを感謝いたします。あなたの秩序に従って、治め、仕えるようにと務めを人に与えてくださっていることを感謝いたします。

しかし、あなたが造られた豊かな世界に抱かれながら、経済的な利益のために被造物のいのちを破壊し続けている愚かさを悔い改めます。土のちりから創られたわたしたちが、土にふれ、しっかりと地にあしをつけた歩みを進めることができますように。いのちにふれ、ともにあなたに造られた喜びをうけることができますように。

新型コロナウイルス感染症の広まりによって、わたしたちは揺さぶられています。いまなお、過酷な労働の中で社会生活を支える働きについている人々をお守りください。感染の苦しさの中で痛む人々をいやしてください。召された人々の魂が安らかであり、遣された人たちが慰められますように。社会が混乱し、働く場がなくなり、希望の持てない日々を過ごす人々の傍らに立ち、慰め、今日1日を生きる力を与えてください。

人と人との間隔が広がり、関係性まで距離ができ、分断が広がっています。今まで当たり前のように集まり、触れ合っていたことができなくなりました。敵意や憎しみが顕わになります。強いものはより強く、弱い者はより弱くされていきます。そのような分断を乗り越えていくことができますように。

最も弱いところに立たれるあなたの場所に私たちの心とからだを置くことができますように。心をすましていのちの痛みの声に聴くことができますように。勇気をもって声をあげることができますように。そして繋がっていくことができますように。いのちの危機にあるすべての人々、すべての被造物をお守りください。

私たちの前に先立って進み、わたしたちの側らにたってください、私たちの後ろから背中をおし、私たちを底から支えてくださる主イエス・キリストのみ名によってお祈り致します。

アーメン







NCC-URM共生庵／ZOOM セミナー＜報告書＞
「第22回NCC-URM全国協議会」
主題 「食・農・命」

2022年6月10日発行
編集・発行：NCC-URM委員会
〒657-0051 神戸市灘区八幡町4-9-22
神戸学生青年センター内
TEL 078-891-3018 FAX 078-891-3019
URL:<https://ksyc.jp/ncc-urm/> e-mail:hida@ksyc.jp
郵便振替＜00960-2-145645 NCC-URM＞

カンパ1000円